

北原2遺跡第1・2次 北原4遺跡

発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第207集



2013

公益財団法人 山形県埋蔵文化財センター



きたはら

北原 2 遺跡第 1・2 次

きた はら

北原 4 遺跡

発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 207 集

平成 25 年

公益財団法人 山形県埋蔵文化財センター





北原 2 遺跡第 2 次 北側検出状況（南から）



北原 2 遺跡第 2 次 調査区全景（↑北）



北原2遺跡全景（南から）



北原 4 遺跡全景 (南から)

序

本書は、公益財団法人山形県埋蔵文化財センター（平成 24 年 4 月 1 日財団法人から移行）が発掘調査を実施した、北原 2 遺跡、北原 4 遺跡の調査成果をまとめたものです。

北原 2 遺跡、北原 4 遺跡は、山形県内陸部に位置する村山市にあります。村山市は東に奥羽山脈の鶴岳、西に出羽丘陵の月山・葉山に囲まれ、中央には最上川が北に流れる、豊かな自然に恵まれています。市内には旧石器時代から中世にかけて 150 カ所を超える遺跡が確認されており、縄文時代には最上川の段丘上を中心に、大規模集落を含む多くの集落が各時期にわたり築かれています。

この度、東北中央自動車道（東根～尾花沢）建設事業に伴い、事前に工事予定地内に包蔵される、北原 2 遺跡及び北原 4 遺跡の発掘調査を実施しました。

北原 2 遺跡の調査では、溝跡や倒木痕が複数検出され、それらの遺構から縄文時代晚期を中心とする土器が出土しました。

北原 4 遺跡の調査では、丘陵部に土坑や溝跡が検出され、縄文時代早期から晚期までの幅広い時期の土器や石器が出土しました。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先のつくり上げた歴史を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちに課せられた重要な責務と考えます。その意味で本書が文化財保護活動の普及啓発や、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりますが、当遺跡を調査するに際し御支援、御協力いただいた関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

平成 25 年 3 月

公益財団法人 山形県埋蔵文化財センター

理事長 相馬周一郎

凡　　例

- 1 本書は、東北中央自動車道（東根～尾花沢）建設に係る「北原2遺跡・北原4遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 既刊の年報、速報会資料、調査説明会資料などの内容に優先し、本書をもって本報告とする。
- 3 調査は国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所の委託により、公益財団法人山形県埋蔵文化財センター（平成24年4月1日財団法人から移行）が実施した。
- 4 本書の執筆は、渡辺和行、後藤枝里子が担当し、三浦秋夫、小笠原正道、黒坂雅人、齊藤敏行、伊藤邦弘、須賀井新人が監修した。本書の執筆分担は、以下のとおりである。

第Ⅰ章 渡辺和行

第Ⅱ章 後藤枝里子

第Ⅲ章 第1～2節 渡辺和行 第3節 後藤枝里子

第Ⅳ章 第1～2節 渡辺和行 第3節 後藤枝里子

第VI章 渡辺和行

- 5 遺構図に付す座標値は、平面直角座標系第X系（世界測地系）により、高さは海拔高で表す。方位は座標北を表す。

- 6 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

SK…土坑 SD…溝跡 SE…井戸跡 SP…ピット SG…河川跡

SX…性格不明遺構 RP…登録土器 RQ…登録石器

- 7 遺構・遺物実測図の縮尺・網点の用法は各図に示した。

- 8 写真図版の遺物番号は図面図版の遺物番号に対応する。

- 9 遺物実測図の断面黒塗りは須恵器を表す。

- 10 基本層序および遺構覆土の色調記載については、2008年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」によった。

調査要項

調査委託者 土国交通省東北地方整備局山形河川国道事務所
調査受託者 財團法人山形県埋蔵文化財センター（平成 22・23 年度）
公益財團法人山形県埋蔵文化財センター（平成 24 年度）
受託期間 平成 22 年 4 月 1 日～平成 23 年 3 月 31 日
平成 23 年 4 月 1 日～平成 24 年 3 月 31 日
平成 24 年 4 月 6 日～平成 25 年 3 月 29 日

遺跡名 北原 2 遺跡
遺跡番号 208-073
所在地 山形県村山市大字本飯田字北原
現地調査 平成 22 年 5 月 19 日～10 月 29 日
平成 23 年 5 月 9 日～6 月 30 日
調査担当者 平成 22 年度 調査課長 阿部明彦
課長補佐 伊藤邦弘
専門調査研究員 佐竹弘嗣（調査主任）
調査研究員 渡辺和行
調査員 戸田 敏
調査員 渡部裕司
平成 23 年度 調査課長 安部 実
課長補佐 伊藤邦弘
調査員 渡部裕司（調査主任）
調査員 濱松優介

遺跡名 北原 4 遺跡
遺跡番号 208-069
所在地 山形県村山市大字本飯田字北原
現地調査 平成 22 年 5 月 21 日～11 月 26 日
調査担当者 平成 22 年度 調査課長 阿部明彦
課長補佐 伊藤邦弘
専門調査研究員 佐竹弘嗣（調査主任）
調査研究員 渡辺和行
調査研究員 戸田 敏
調査員 渡部裕司

整理作業

整理担当者 平成24年度 整理課長 黒坂雅人
調査員 後藤枝里子(整理主任)

調査指導 山形県教育庁文化財保護推進課

調査協力 東日本高速道路株式会社東北支社山形工事事務所
村山市教育委員会
山形県教育庁村山教育事務所
村山東根土地改良区

業務委託 基準点測量業務 株式会社山形用地補償研究所
地形・遺構測量(俯瞰撮影)業務 株式会社成和技術
株式会社ワクニ

理化学分析業務 山形大学高感度加速器質量分析センター
バレオ・ラボ株式会社

発掘作業員 井上正一 大場敏行 尾崎友恵 海藤キミヨ 海藤淨 工藤隆悦 小林弘
小松薰 今野弘 佐々木栄一 笹原功 笹原登 寺崎勝 二藤部一男
平山勝子 平山繁 細矢智子 村岡淳子 元木實 森芳子 森田栄一
八鍛正清 山口裕美子 山田三恵子 結城吾郎 (五十音順)

整理作業員 木村真之 日下部明子 柴田敏夫 菅井ひろみ 林真世
(五十音順)

目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経緯	1
2 発掘調査の経過と方法	1
3 グリッド設定	2
4 整理作業の経過	2
II 遺跡の位置と環境	
1 地理的環境	4
2 歴史的環境	4
III 北原 2 遺跡	
1 遺跡の概要	8
2 遺構	8
3 出土遺物	9
IV 北原 4 遺跡	
1 遺跡の概要	11
2 遺構	11
3 出土遺物	11
V 理化学分析	
1 放射性炭素年代測定 (1)	13
2 放射性炭素年代測定 (2)	15
3 樹種同定	17
VI 総括	
1 北原 2 遺跡	18
2 北原 4 遺跡	18
報告書抄録	卷末

表

表 1 遺跡位置図の遺跡名と時代	7	表 6 北原 2 遺跡縄文土器観察表	52
表 2 測定資料および処理方法 (1)	13	表 7 北原 2 遺跡石器・石製品観察表	52
表 3 放射性炭素年代測定および歴年較正の結果 (1)	13	表 8 北原 4 遺跡縄文土器観察表	53
表 4 測定資料および処理方法 (2)	15	表 9 北原 4 遺跡須恵器観察表	53
表 5 放射性炭素年代測定および歴年較正の結果 (2)	15	表 10 北原 4 遺跡石器・石製品観察表	53

図 版

第 1 図 調査区全体図	3	第 21 図 北原 2 遺跡遺物実測図(4)	33
第 2 図 地形分類図	5	第 22 図 北原 2 遺跡遺物実測図(5)	34
第 3 図 遺跡位置図	6	第 23 図 北原 4 遺跡調査区全体図	35
第 4 図 番年較正年代グラフ(1)	14	第 24 図 北原 4 遺跡遺物全体図	36
第 5 図 番年較正年代グラフ(2)	16	第 25 図 北原 4 遺跡遺構配置図(1)	37
第 6 図 北原 2 遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真	17	第 26 図 北原 4 遺跡遺構配置図(2)	38
第 7 図 北原 2 遺跡調査区全体図	19	第 27 図 北原 4 遺跡遺構配置図(3)	39
第 8 図 北原 2 遺跡遺構全体図	20	第 28 図 北原 4 遺跡遺構配置図(4)	40
第 9 図 北原 2 遺跡遺構配置図(1)	21	第 29 図 北原 4 遺跡基本構序	41
第 10 図 北原 2 遺跡遺構配置図(2)	22	第 30 図 北原 4 遺跡遺構図(1)	42
第 11 図 北原 2 遺跡遺構図(1)	23	第 31 図 北原 4 遺跡遺構図(2)	43
第 12 図 北原 2 遺跡遺構図(2)	24	第 32 図 北原 4 遺跡遺構図(3)	44
第 13 図 北原 2 遺跡遺構図(3)	25	第 33 図 北原 4 遺跡遺構図(4)	45
第 14 図 北原 2 遺跡遺構図(4)	26	第 34 図 北原 4 遺跡遺構図(5)	46
第 15 図 北原 2 遺跡遺構図(5)	27	第 35 図 北原 4 遺跡遺構図(6)	47
第 16 国 北原 2 遺跡遺構図(6)	28	第 36 国 北原 4 遺跡遺構図(7)	48
第 17 国 北原 2 遺跡遺構図(7)	29	第 37 国 北原 4 遺跡遺物実測図(1)	49
第 18 国 北原 2 遺跡遺物実測図(1)	30	第 38 国 北原 4 遺跡遺物実測図(2)	50
第 19 国 北原 2 遺跡遺物実測図(2)	31	第 39 国 北原 4 遺跡遺物実測図(3)	51
第 20 国 北原 2 遺跡遺物実測図(3)	32		

写 真 図 版

卷頭写真 1 北原 2 遺跡第 2 次 北側検出状況	北原 2 遺跡
卷頭写真 2 北原 2 遺跡第 2 次 調査区全景	北原 4 遺跡
写真図版 1 トレンチ調査区完掘全貌	写真図版 14 トレンチ調査区完掘全貌
トレンチ e・g・h・i・k・p 完掘状況	トレンチ 11・13・③・②完掘状況
写真図版 2 SK29 SX10 SK54	写真図版 15 SK15 SK19 SK24 SK58 SK61 SK98
写真図版 3 SX6 SX30 SX36 SD25 SD52	SK125 SK140
写真図版 4 SD53	写真図版 16 SK154 SK157 SK165 SK166 SK171 SK189
写真図版 5 SX51 遺物№34・8 出土状況	写真図版 17 SP14 SP16 SP18 SP89 SP97 SP99
写真図版 6 出土遺物(1)	SP120 SP151
写真図版 7 出土遺物(2)	写真図版 18 SK10 SK13 SK28 (倒木痕)
写真図版 8 出土遺物(3)	写真図版 19 SK23 SK63 SK127 (倒木痕)
写真図版 9 出土遺物(4)	写真図版 20 SK131 SK116 SK145 (倒木痕)
写真図版 10 出土遺物(5)	写真図版 21 SK156 SK188 (倒木痕)
写真図版 11 出土遺物(6)	写真図版 22 出土遺物(1)
写真図版 12 出土遺物(7)	写真図版 23 出土遺物(2)
写真図版 13 出土遺物(8)	写真図版 24 出土遺物(3)
	写真図版 25 出土遺物(4)

I 調査の経緯

1 調査に至る経緯

A 北原 2 遺跡

北原 2 遺跡の発掘調査は、国土交通省山形河川国道事務所による東北中央自動車道（東根～尾花沢）建設に伴った緊急発掘調査である。

遺跡登録年度は平成 11 年度である。平成 22 年度に第 1 次調査、平成 23 年度に第 2 次調査を行った。第 1 次調査は平成 22 年 4 月 1 日付けで、第 2 次調査は平成 23 年 4 月 1 日付けで事業者である国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所と委託契約を結んだ。その後に関係各所と事前打合せを行い調査期間、調査の方法、実施計画、問題点などについて協議を行った。それを経て平成 22 年 5 月 19 日に第 1 次調査を開始した。第 2 次調査は平成 23 年 5 月 9 日に開始した。いずれの調査にあたっても発掘調査開始に先立ち文化財保護法第 92 条に基づく「埋蔵文化財発掘調査の届け出」を山形県教育委員会に提出、受理された後「埋蔵文化財の発掘調査についての通知」を受け取り調査を開始した。

B 北原 4 遺跡

北原 4 遺跡の調査は、国土交通省山形河川国道事務所による東北中央自動車道（東根～尾花沢）建設に伴った緊急発掘調査である。遺跡登録年度は北原 2 遺跡と同様の平成 11 年度であり、平成 22 年度に発掘調査を行った。調査までの経緯は北原 2 遺跡の 1 次調査と同様である。

2 発掘調査の経過と方法

A 北原 2 遺跡

第 1 次調査

トレンチ調査を行うため調査区の範囲を確認し、トレ

ンチを入れる箇所を定めた。その後、重機を用い表土掘削を開始した。調査区内南側に用地引き渡し未了の部分があったためそこを除く箇所に 13 本のトレンチ調査を行った。いずれも平面図と土層断面並びに写真撮影などの記録作業を行ながら順次進めた。9 月 15 日に引き渡し未了箇所の引き渡しが完了し、同地にトレンチ 4 本を設定した。遺物の出土が顕著で遺跡範囲外の南側にも広がることが想定されたため 9 月 28 日に山形河川国道事務所に連絡し遺跡範囲外とした高速道路用地内の坪掘の許可を得て 10 月 29 日まで調査を行った。その結果遺物が出土し、遺構が検出されたため、山形県教育委員会に報告し、新たに遺跡範囲に追加した場所を拡張し、次年度第 2 次調査として調査を行うこととなった。

第 2 次調査

第 1 次調査を踏まえた拡張区 1050 m²を設定し平成 23 年 5 月 9 日～6 月 30 日まで調査を行った。

まず、調査区の櫛張りを行い、その後に重機による表土除去を行った。その後、遺構を検出し随時記録を取りながら半裁、完掘を行った。適宜、写真撮影を行った。6 月 28 日に空中写真測量並びに調査説明会を行い、6 月 30 日に撤収した。

B 北原 4 遺跡

北原 4 遺跡は北原 2 遺跡と同様に遺跡範囲内にトレンチを 9 本設定し、重機による表土除去を行った。結果、遺構検出及び遺物の出土を確認することができなかつた。そのためトレンチの掘削深度を変え、最初に掘ったトレンチ同土の間に追加トレンチとして 6 本のトレンチを設定し表土の掘削を行った。しかし、この際も明確な遺構は検出されず遺物も出土しなかつた。その後、遺跡範囲の北側に位置する丘陵付近において遺物を表探できたことから許可を得て高速道路用地内の坪掘とトレンチ調査を行った結果、遺構と遺物が検出され、6 月 25 日を以て拡張調査区とし、7 月 13 日より重機を使用し

1 調査の経緒

ての表土除去を行い随時面整理、遺構検出を開始した。調査区西側に引き渡し未了の箇所があったが7月23日引き渡しが完了し、こちらの箇所についても拡張区として許可を得て表土除去を開始した。その後、遺構検出、半裁、完掘及び記録作業を随時進め、先行して終了して欲しいと連絡を受けていた高速道路建設に伴うボックスカルバート工事に係る北側の一部の調査区を9月17日に終了した。その後、随時記録を取りながら作業を進め10月29日に現場を撤収した。なお、天候の関係から空中写真撮影を11月1日に行った。

調査説明会は11月20日に沼田2遺跡と共に開催された。

は放射性炭素年代測定で、結果は第V章に掲載した。

出土遺物は、報告書に掲載したものを別に収納した。なお、報告書掲載遺物については図番号を注記に追加している。

3 グリッド設定

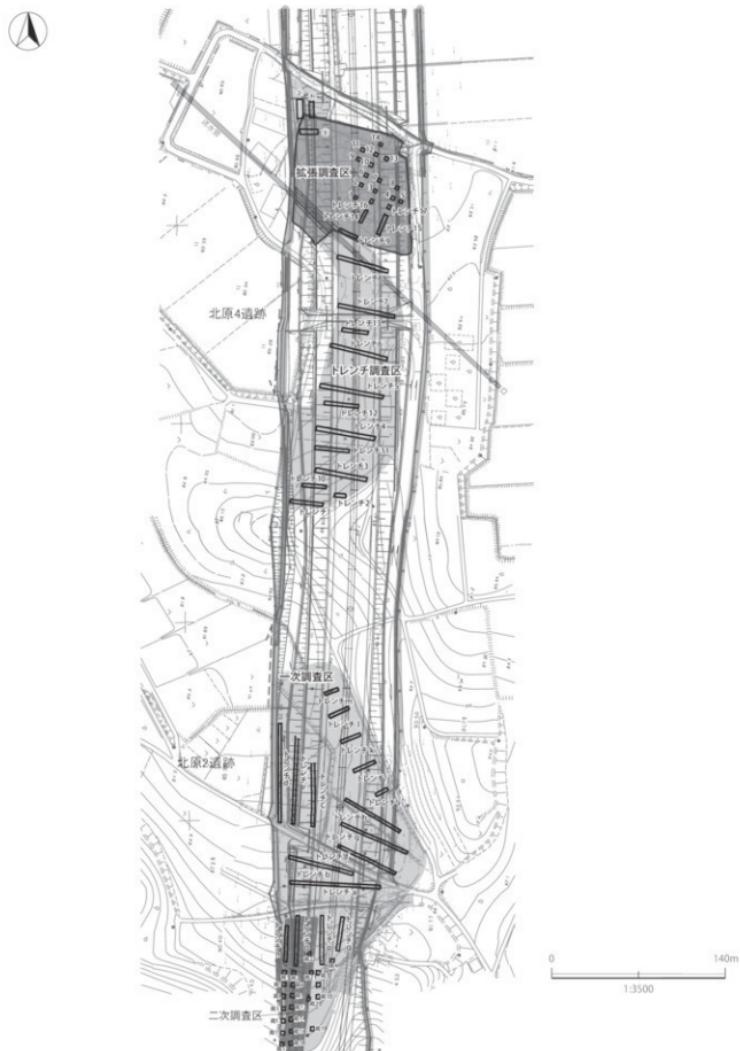
北原2遺跡・北原4遺跡共に平面直角座標系第X系X = -260000、Y = -120000を原点とし40km方眼の大グリッドを設定した。原点を基準として北及び東へAから順にアルファベットを付し、X軸（南北）とY軸（東西）に付された2文字を大グリッド名とした。40kmの大グリッドを400m毎に分割し、中グリッドを設定した。それぞれの大グリッドの交点を基準としてX軸、Y軸に付された数字を合わせた4桁の数字に、大グリッド名を合わせたものを中グリッド名とし、さらに中グリッドを4m毎に分割し、小グリッドを設定した。中グリッド同様に数字を配列し中グリッド名の後にハイフンを付しその後に並ぶ4桁の数字を含めて小グリッド名とした。

なお、遺構出土の遺物で座標を取得していないものはこの小グリッド名で取り上げを行っている。

4 整理作業の経過

出土遺物は洗浄後、注記を行った。注記は遺跡毎に遺跡名を「北原2」、「北原4」とし、北原2遺跡の第2次調査の場合は「北原2-2」とした。出土遺構もしくはグリッド・取得座標名の順に記載した。なお、グリッド名は下4桁を記した。出土年月日は省略した。

その後、接合、復元、抽出、実測、拓本、写真撮影を行いコンテナに収納した。遺物・遺構の図面と共にデジタルトレースを行い修正や編集を行った上で写真と共に版組を行った。理化学分析として業務委託を行ったの



第1図 調査区全体図

II 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

山形盆地は、山形県内陸部のほぼ中央に位置し、東側を奥羽山脈、西側を月山や葉山などの出羽丘陵に挟まれた、南北約40km、東西約20kmの船底形を呈する盆地である。盆地中央部には、県内を貫流し日本海に注ぐ母なる川「最上川」が北流し、盆地両側の丘陵に源を発する中小河川がこれに合流し注ぐ。これら河川流域には、先史時代より集落遺跡が点在し、歴史的にも内陸部の政治、経済の分野においても重要な役割を果たしてきた。

この地域の環境は東西に挟むようにそびえる山々の存在により特徴づけられる。両側に存在する山々により、冬の北西季節風や梅雨季の「ヤマセ」が遮られ、温暖な気候となっており、さくらんぼなどの果樹栽培や稲作などに有利な条件をもたらしている。しかし盆地特有の冷え込みと、日本海からの湿った空気が奥羽山脈にぶつかり、多量の雪を降らせるため、平地としては県内有数の豪雪地帯であり、冬の気候は厳しいものとなる。

北原2・4遺跡の所在する村山市はこの盆地の北部を占める。市域を東西に二分する最上川は、盆地西縁部で葉山系の丘陵を蛇行して切り込み、その東側には奥羽山脈から端を発する大沢川。^{おおさわがみ} 大沢川より形成された桶岡扁状地、^{とうおかひょうじや} 楠山扁状地の二つの扁状地がみられる。

本遺跡は山形盆地と尾花沢盆地との境に広がる丘陵に位置し、西側には本飯田地区東方の山地から西流する沢の目川が流れる。北東に向かってなどらかな丘陵地となり、南端部は東・西・南側を山麓斜面に囲まれ、舌状丘陵の先端部に立地し、畑地として利用されてきた。

北原4遺跡はなどらかな丘陵地上に位置し、北原2遺跡は舌状丘陵の南端に位置する。

北原2・4遺跡の西側を流れる最上川の両岸には、最上川の旧河床が隆起して台地となった数段の河岸段丘が各所に形成されており、これら河岸段丘の大半は洪積帯に形成され、沖積帯にはほとんど安定した地形となる。周辺地域の縄文時代集落遺跡の大半がこれら河岸段丘の台地上に立地している。

2 歴史的環境

山形盆地北部から尾花沢盆地にかけての北村山地域には縄文時代の遺跡が多いことで知られる。特に縄文時代晚期の遺跡では、本遺跡を含め約20遺跡を数え、周辺に位置する遺跡も含めると県内の縄文時代晚期の遺跡総数の約20%近くが村山地域に集中する。

村山市に所在する縄文時代の遺跡の多くは、市域の西側、最上川左岸の段丘、^{さかのかみ} 富並川左岸の河岸段丘、大高根南麓の山裾部に所在するもので、最上川に沿って集落跡が点々と分布する特徴的なありがたや、富並川をよりどころとして、規模の大きな集落地点を遷しながら、連鎖と形成する様子などが注目される。

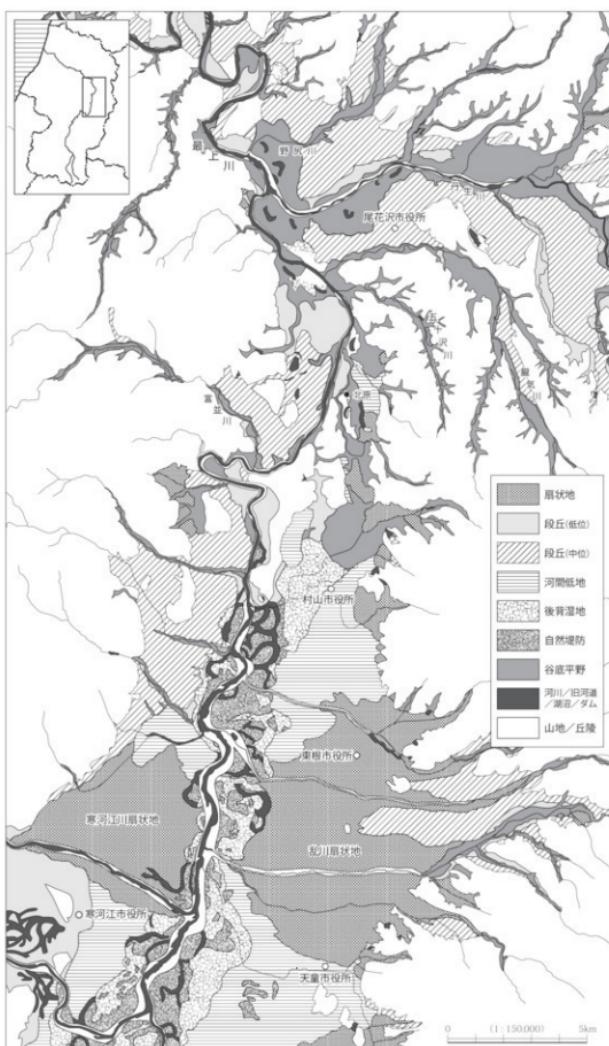
北原2・4遺跡周辺にも縄文時代の遺跡が多数確認されている。沢の目川流域の最上川右岸直上の段丘面を主として縄文時代の遺跡が占地している。

縄文時代早・前期の遺跡として、尖底の深鉢形土器や貝殻腹縁压痕の土器群が出土する赤石遺跡が、北原遺跡の北西、最上川右岸の段丘上に所在する。また本遺跡の南の丘陵上に位置する堀山遺跡からは尖底土器の破片が出土したことが確認されている。

中期では本遺跡の北西に位置する沼田遺跡が、沢の目川右岸のなどらかな丘陵上に立地し、さらに北には大木7b式を主とした大量の土器群が得られている落合遺跡が所在する。

北原遺跡は上記の赤石遺跡・沼田遺跡と共に、昭和52(1977)年に山形県教育委員会により山形県営圃場整備事業・袖崎地区・送水管工事に係る緊急発掘調査が行われた。北原遺跡は沼田遺跡と共に、その前年、昭和51(1976)年に行われた県の埋蔵文化財包蔵地の分布調査の結果、新たに遺跡範囲が確認された遺跡である。

調査は調査区画が狭いため、グリッド掘りにより行われ、丘陵先端部の南側傾斜面より、土坑や2基の登り窓跡などが確認された。遺物としては縄文時代中期前葉から中葉（大木7b～大木8b）の土器の破片や、使用痕の残る石器が出土している。



※公開シンポジウム「河川流域の縄文頃縄」(東北芸術工科大学 2010) 資料より抜粋

第2図 地形分類図

II 遺跡の位置と環境



※国土地理院発行 5万分の1地形図「延辯」「富並」使用

第3図 遺跡位置図

表1 遺跡位置図の遺跡名と時代

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	北原3	散布地	縄文	38	上生田橋山	城館跡	中世
2	北原2	散布地	縄文・平安	39	元木	集落跡	奈良・平安
3	堀山2	散布地	縄文	40	伴見	集落跡	縄文
4	北原4	散布地	縄文(中期)・平安	41	落合	集落跡	縄文(中期)・平安
5	沼田	包蔵地	縄文(前・中・後期)・平安	42	八合田	散布地	縄文(中期)・弥生
6	沼田2	散布地	縄文(中期)・平安	43	上生田橋	城館跡	中世
7	赤石	集落跡	縄文(早・前・晚期)	44	ヘグリA	集落跡	縄文
8	沼田	散布地	縄文・平安	45	ヘグリB	集落跡	縄文
9	堀山	集落跡	縄文	46	ヘグリ	集落跡	縄文・平安
10	北原	生産地	縄文・近世以前	47	沖	集落跡	縄文(前)期
11	高鶴山	城館跡	中世	48	ドゾキ	集落跡	縄文(前・中期)
12	十字山	城館跡	中世	49	小林	集落跡	縄文(中期)・平安
13	北沢	散布地	縄文	50	下ノ原	散布地	不詳
14	高来沢A	集落跡	縄文	51	白金	集落跡	縄文(早・前)期・平安
15	高来沢B	集落跡	縄文	52	小菅	集落跡	縄文
16	飯田橋	城館跡	中世	53	田前	集落跡	縄文(中・晚期)
17	大原口	集落跡	縄文	54	羽根沢D	散布地	縄文(早・前)期
18	東熊野岱畠	集落跡	縄文	55	田代小学校前	集落跡	縄文(中期)
19	本飯田赤石	散布地	縄文・平安	56	羽根沢E	集落跡	不詳
20	清水北	散布地	縄文・平安	57	羽根沢F	集落跡	縄文(後・晚期)
21	清水	散布地	縄文・平安	58	羽根沢A	集落跡	不詳
22	星立	城館跡・集落跡	中世	59	馬坂	散布地	縄文(前)期
23	今宿D	散布地	縄文	60	小野原(御山)	集落跡	羽根沢・赤石(中・後期)・平安
24	古戸敷	集落跡	縄文	61	羽根沢B	集落跡	縄文(中期)
25	今宿大谷地	集落跡	縄文	62	羽根沢C	集落跡	縄文(前)期・平安
26	今宿C	集落跡	弥生	63	長崎山A	集落跡	不詳
27	今宿B	散布地	縄文	64	新山寺A	集落跡	縄文(前)期
28	今宿A	散布地	縄文(中期)	65	新山寺B	集落跡	縄文(中期)
29	百枚2	散布地	縄文(後期)	66	新山寺C	散布地	不詳
30	百枚1	散布地	縄文(中・後・晚期)	67	長崎山B	集落跡	縄文(中期)
31	細田	集落跡	縄文	68	西山C	集落跡	縄文
32	道出	散布地	縄文(後・晚期)	69	西山B	散布地	縄文
33	追分	集落跡	縄文	70	田代新田	集落跡	縄文
34	森の原	集落跡	縄文	71	西山A	集落跡	縄文
35	北島	集落跡	縄文・奈良・平安・中世	72	境ノ目	集落跡	縄文
36	清水瀬2	集落跡	縄文・平安	73	小瀬C	散布地	縄文
37	清水瀬1	集落跡	縄文	74	小瀬B	集落跡	縄文

参考文献

- 山形県教育委員会 1981『赤石遺跡北原遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第35集
 山形県教育委員会 1992『西海瀬遺跡』山形県埋蔵文化財調査報告書第174集
 財團法人山形県埋蔵文化財センター 1999『宮の前遺跡第3次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第65集
 財團法人山形県埋蔵文化財センター 2011『作野遺跡第3次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第205集
 村山市 1982『村山市史 別巻一 原始・古代編』

III 北原 2 遺跡

1 遺跡の概要

平成 22 年度に行った第 1 次調査では調査区内にトレンチを十数本設定し遺構の検出及び遺物の出土状況を確認した。遺構の検出及び遺物の出土状況を鑑み扯張区として調査を行う必要のある箇所を設定し終了した。次年度の平成 23 年度に第 2 次調査として 1050 ml の調査区を設定し調査を行った。その結果、溝跡、土坑、ピット、性格不明遺構などが検出された。

遺構の検出方法に関して記す。まず、重機により表土を掘削したのち、人力で遺構検出を行った。その際に、淡い黒色の土色変化が確認できた箇所に関して、遺構登録を行った後、トータルステーションを使用した平面図作成を行った。検出図面の作成が終了した遺構は、遺構であるか否かの確認のために、検出した遺構の輪郭に沿い、段下げを行った。その際に、黒色の土色変化が消失してしまったものや、不整形のものに関しては、遺構登録から抹消した。また検出時に出土した遺物に関しては、トータルステーションにより座標記録を行い、整理作業の段階で、どの地点から出土したのかを明確にした。

以下に、検出された遺構に関して、遺構種別ごとに記載する。

2 遺構

図化したものの内、遺物を伴い遺跡内で特質すべきものについてここに記す。

A 土坑

27 基確認している。調査区全域に確認できた。すべて、半截した後に、必要に応じて記録を作成した後、完掘を行った。ほとんどが、地形の落ち込みや、植物根への自然堆積、あるいは、検出面より上部からの振り込みであると考えられる。

また、遺物の出土は、SK29 以外では確認できていない。

SK29（第 11 図）

調査区中央西側に位置する、長径 1m、短径 0.8m の土坑である。北側を SD53 に接する。検出を行った際に、3 層が土坑の外周を縁取り、その中に 1 層の黒色土が円形になっているのが確認できた。振り下げを行ったところ、北側の壁から縄文土器の深鉢の体部が出土した。半截を行い、断面を確認したところ、柱痕のような堆積が確認できた。また、底面まで振り下げを行ったところ、底面直上で RP11（遺物 No.33）を確認し、座標を記録後、取り上げを行った。8 層の振り下げを行った際には、地下水の湧出が見られた。砂質の土とシルト質の土が互層となって堆積している箇所もあるため、水成堆積の可能性もある。

B 溝跡

3 条確認している。調査区中央～北西部にかけて確認している。すべて、長軸は南北方向を向く。SD25・53 からは、遺物の出土が見られ、そのほとんどが、縄文土器であった。以下にその詳細を記す。

SD25（第 14 図）

調査区中央西側に位置する、幅 1.1m、長さ 7.6m の溝跡である。南北に調査区外まで延びる。平面プランは、Y 字型を呈しているが、覆土の色調、土質等を観察すると、同じ構であったものが、2 又に分かれたものと考えられる。水成堆積を示すような、砂粒は確認できなかつた。また、覆土の 1 層から遺物番号 3 が出土している。そのほかにも、土器片は出土を確認しているが、すべて破片であり、時期の特定は困難である。

SD52（第 15 図）

調査区西端に位置する。幅 0.7m、長さ 3.1m を測る。北側は倒木痕による搅乱を受けている。断面は、V 字状を呈しており、下層には水成堆積を示すような、砂層の堆積が確認できた。

SD53（第 16 図）

調査区中央西側に、南北に延びる溝跡である。検出時のプランの大きさは幅約 0.8m、長さ約 2.4m を測る。倒木痕（SX51）によって擾乱を受けているが、SX51 下層には、SD53 の覆土と考えられる堆積土が確認できた。今回の調査において最も多くの遺物が出土した遺構である。ほとんどが破片で、縄目文様が確認できるものが多いことから、縄文時代に帰属するものと考えられる。中には、三叉文が確認できた破片もあり、この溝跡は、少なくとも縄文時代晚期末までに埋没していたものと考えられる。遺物は、ほとんどが黒ボク層の中に集中しているが、中には、褐色粘土層（9 層）から出土した遺物 № 35 も確認できた。この褐色粘土層にはグライ化したような、白色を呈するブロックも混入していた。

C 性格不明遺構

SX51（第 16 図）

調査区中央西側、SD53 を切るように形成された遺構である。aa' 間の 14 ~ 16 層は SD53 の堆積土であると考えられる。これらの 14 ~ 16 層は、13 層の地山ブロックの下部で確認されている。また、遺物の出土を確認したのは、すべて黒色土中であった。

SX30（第 13 図）

調査区北西に位置する。黄褐色を呈する地山土が散見され、さらに、その下部に黒色土が入り込んでいる。風倒木由来と考えられる。西側に位置する、南北に長い落ち込みは、SD53 に由来する可能性が考えられる。遺構検出の段階で、珪質頁岩製の無茎石器 RQ15（遺物 № 41）が出土している。また、掘り下げを行ったところ、いずれも縄文時代後晚期に属するとと思われる、土器（遺物 № 2・7・36・39）などが出土した。

3 出土遺物

調査では縄文時代中期から晩期にかけての土器が出土した。また石器も数点出土している（第 19 ~ 22 図）。

A 縄文土器

縄文時代中期の遺物としては 1 の 1 点のみが出土した。1 は中期の中葉、大木 8b 式～大木 9 式古階段、隆帶による連結溝巻文が文様の主体の破片である。

縄文時代後期のものも 2 の 1 点だけである。2 は口縁部に二条の平行沈線をめぐらせ、口唇部には刻みを施す。体部には鋸歯状の工具による櫛描文が施される。

今回の調査で出土した縄文土器の多くは晩期に属するものである。3 は無文の破片で、その屈曲より注口土器であると推察される。晩期初頭の大洞 B 式に比定すると考えられ、表面は丁寧なミガキによる調整が施されるが、屈曲上部の表面が剥離している。被熱によるものとみられる。4 は大洞 B 式のもので、口縁部に入組三叉文が施される。外面には炭化物が付着し、器厚は薄く、体部には内外面からの補修孔をもつ。5 も同じく晩期初頭のもので、波状口縁をもち、レンズ状文と沈線で区画した部分に三叉文を配置する。6 は方形平底の底部をもつ壺であると考えられる。平行沈線で区画し横帯文とし、他を無文とするもので、晩期初頭のものと考えられる。上部にわずかながら入組文と考えられる文様がみとめられる。内外面共に丁寧なミガキ調整を施す。底部はほぼ平らの平底であるが、内側の四隅に加工の跡が認められ、四隅の底部を内側から押し出すようにして外に膨らませ、四足を造形しようとしたのではないかと推測される。

7 は晩期中葉、大洞 C1 式の注口土器で、屈曲部を突起状に成形後、刻みをいれ、入組文を施している。外面はナデ調整、外面は丁寧なミガキ調整が施される。8・9 は共に晩期中葉、大洞 C2 式の鉢の口縁部である。8 は口縁部に三条の平行沈線をめぐらせ、体部に LR 原体による縄文を地文にもつ。9 も同様に口縁部に三条の平行沈線を施すが、8 より沈線間の幅が広く、ナデ調整が見られる。

また晩期終末の資料として 2 点が出土した。10 は口縁部に変形工字文を施す小型の鉢である。LR 原体の縄

文を施し、沈線で区画し、区画線までナデ調整を施している。また口縁部は変形工字文を施文のち、ミガキ調整を行っている。11は破片であるが、沈線が一ヵ所で連結し変形工字文が確認できる。10・11共に縄文時代晩期末の大洞A'式のものである。

出土した縄文土器の多くは時期の判別が困難な、縄文のみの施文、または無文の粗製土器である。出土した粗製土器の中から口縁部のもの、または特徴的な形状のものを取り上げ、次の5つに分類した。

- ①口縁直下から縄文を施文するもの
- ②口縁部にナデ調整で無文帯をつくるもの
- ③補修孔をもつもの
- ④無文のもの
- ⑤底部

①に分類されるものは12～21の10点である。すべて平縁の深鉢である。12・21の外には炭化物が付着し、煮炊き用に使用されたものと考えられる。14の内面にはミガキによる調整がみられる。15は口唇部および内面にミガキ調整を施している。また表面の残存状態がよく、燃った織維までが確認できる。16はRLとLRの2種の原体を用いた羽状縄文を地文とする。18・19は接合しないが、内面の口縁部に横方向の粗いケズりが同様にみられるため、同一個体と考えられる。

②に分類されるものは22・23・24の3点である。22・23は縄文を施文したのち、口縁部のみをナデにより無文としている。24は輪積み痕が明瞭に残り、口縁部内面に盛り上がりが残ることにより、体部に縄文を施文後、口縁部の無文帯を積み成形していると考えられる。

③に分類されるのは25・26・27・28の4点である。25は5字状の結束をもつLR原体で口縁部直下から全面に縄文を施文している。口縁部、内面共にミガキ調整が施され、内外面共に炭化物が付着している。口縁から約6cmのところに補修孔があけられている。26・27ともに補修孔部分が半分欠けているが、どちらとも内外両面から穿孔していることがわかり、外面には回転して穿孔した後が明瞭に確認できる。28は底部以外ほぼ完形の土器で、他の補修孔をもつ資料とは異なり、無文の土器で補修孔をもつものである。上器自体は内外両面ともにナデ調整、口縁部に光沢が残ることより、ミガキ調整を施したものと考えられる。外面には炭化物が付着し、煮

炊きに使用された様子が伺える。補修孔は口縁から約3cmの部分にあけられ、その補修孔から右上部3cm付近に欠けてはいるが、もう一つの補修孔が確認できる。

④に分類される無文の土器は29・30・31・32の4点である。29は深鉢の口縁部、30は壺の体部である。30は一部にLR原体の斜縄文が認められるが、主体は無文である。31は小型土器で、輪積み痕がはっきりみてとれる。また内外両面に指で成形したと思われる、指圧痕が明瞭に残っており、手づくね土器であると考えられる。32はその形状より壺の体部と思われる。表面にはわずかながら光沢がみられ、ミガキによる調整が施されたと考えられる。

⑤に分類される底部のみの資料は、33～40の8点が出土している。33は粗製の深鉢の底部である。地文はLR原体による斜縄文で、下方に二重の結節がみとめられる。これは連続して結び目をつけた結節を用いて施文したと思われる。34も深鉢の底部で、底にはナデ調整がみられる。35は底が上げ底となり、体部に立ち上がるくびれ部分には、指圧痕がわずかに残る。38・39ともに鉢の底部で、底には張り出しがつくられ上げ底となっている。39は内外両面の底にも丁寧なミガキによる調整が確認できる。40は一般的なものより台が低いが、台付鉢の台部分と考えられる。体部にはLR原体で斜縄文を施文し、体部と台部の境のくびれ部分に浅く沈線が施される。

B 石 器

41は無茎の石鏃である。全面に微細な調整加工を施し、基部側に凹弧状のわずかな抉り込みが入る。42は明確な使用痕は認められないが、表裏両面が磨り痕により平坦となる。砥石として使用された可能性が推測できる。

IV 北原 4 遺跡

1 遺跡の概要

北原 4 遺跡の地形は丘陵となっている。頂上部付近は地山面が露出し、バックホーのものと思われるキャビラ痕やツメの跡が残されていた。サクランボの木が調査前まで残されていたことから昭和以降にこれらの木を植樹するため開墾したとみられる。

遺物の殆どは黒色土層から出土しており、これはトレンチ調査でも同じ状況を示す。出土した遺物は縄文土器を中心として、石器、平安時代の須恵器がある。但し、遺構内からの出土は少ない。

遺構はピットや土坑、倒木痕である。但し、ピットや土坑の使用目的は判然としない。遺構の全体的な配置として調査区北側と東側で多く検出されている。北側には倒木痕も含めて大きめの遺構が検出され、東側ではピットが多く検出されている。

なお、下記にそれぞれ遺構の種類ごとに記載していくがまず全体的な傾向を述べ、統いて遺物の出土があった遺構や特徴があるものののみを記述する。

2 遺構

A 土坑

平面形は殆ど不定形で検出面からの深さは 15 cm から深いもので 40 cm 程度である。覆土に地山ブロックを含む場合が多い、人為的な埋め土だと考えられる。調査区全体で検出された。

SK58（第 30 図）から遺物 No. 65 が出土している。だが、出土遺物と同時期の遺構とは断定できない。覆土の殆どに大きな地山ブロックを含む。遺物を含む黒色土層は確認出来ない。地山ブロックが一端に偏っていることから倒木痕の可能性がある。

SK140（第 31 図）は SK58 と覆土断面の形状は違うが地山上が上部にあり黒色土層がその下層にあることから倒木痕だと考えられる。

地山由来の土やブロックをあまり含まずプライマリー

に近い黒色土層を覆土に含むことから SK15、19、24、98（以上第 30 図）及び 125（第 31 図）は比較的古い年代の遺構だとみられる。だが遺物の出土がないため、詳細は不明である。

B ピット

平面形は梢円で検出面からの深さは 10 cm から 20 cm 程度を示す。柱穴と思われるものはない。調査区全体で検出された。覆土は単層のものと 2 層以上に分かれるものがある。SP139（第 33 図）からは縄文土器の遺物 No. 46 が出土している。単層の遺構で覆土は黒褐色砂質シルトである。出土遺物の年代は早期末から前期初頭と考えられる。他のピットからの遺物出土はない。

C 倒木痕

平面形は梢円形か不定形である。検出面からの深さ 30 から 60 cm 程度を計る。

これらの倒木痕は調査区に多くの木が生えていたことを示す。調査区の北西側で多く検出され頂上部付近には少ない。北東部で多く検出されているのは頂上部が近現代の開発により削平を受けているのにに対し、あまり開発の影響を受けていないためである。

SK10、SK28（以上第 34 図）から遺物が出土している。いずれも縄文土器である。SK10 出土遺物は縄文土器遺物 No. 47 で縄文時代前期初頭のものと考えられる。SK28 出土遺物は縄文土器遺物 No. 51 で縄文時代中期に帰属する。いずれも倒木痕からの出土であり、その性格から倒れた時に土中にあったものを巻き込んだと考えられる。

3 出土遺物

調査では縄文時代の遺物として縄文土器・石器、奈良・平安時代の遺物として須恵器が出土した（第 37 ~ 39）。その大半は表模もしくは検出段階で出土したものであり、遺構に伴うものは少ない。

A 縄文土器

縄文時代早期から晩期にわたる幅広い時期の土器が出土した。

早期のものは 43・44・45・46 の 4 点である。43 は重層山形押型文を施したもので、早期前葉の日計式のものと考えられる。44 も早期前葉のもので細い櫛歯状の工具で平行沈線を組み合わせ、格子目状に沈線文が施される。内面にはナデ調整を施す。45 は胎土に纖維を含み、沈線文と円形刺突文が見られ、早期中葉頃のものと考えられる。46 は貝殻条痕文を地文として施し、屈曲部に円形の刺突をもつ。胎土に纖維を含み、外面だけではなく内面にも浅く貝殻条痕文が施され、早期終末頃のものと考えられる。

縄文時代前期のものは 47・48・49・50 の 4 点である。47 は接合しなかったが同一個体と考えられる別資料から羽状縄文を施したものと判断した。胎土に纖維を含み、内面には横方向に粗くナデ調整が見られる。早期末から前期初頭にかけてのものと考えられる。48 は結束しない 0 段多条の原体で羽状縄文を施した深鉢の破片であり、胎土に纖維を含む。前期初頭、大木 1 式のものと考えられる。49 は前期前葉の大木 2a 式に比定する平縁の深鉢で、器面には撚糸を巻き付けた絡条体の回転による、網目状の撚糸文が施される。50 は胎土に纖維を含み、上半分に LR 原体の縄文、下半分に横方向のケズりが見られる。輪積み痕が明瞭であり、深鉢の底部付近と考えられる。

51・52 の 2 点は中期に属するものである。51 は深鉢の口縁に近い部分で、二条の沈線の下に無節と思われる原体で縄文が施される。52 は一部分しか残っていないが、連結溝巻文をもつ大木 8b 式と思われる。薄い器厚と湾曲した器形より小型の鉢状のものと考えられる。

後期のものとしては 53・54・55 の 3 点が出土した。53 は体部に沈線を巡らせ、横帯状に文様をあらわしたもので、後期中葉のものと推察される。54 は後期後半のものと考えられ、LR 原体で縄文を施した後、平行沈線で区画し、二条の細い沈線間の縄文を消した磨消縄文の土器である。55 は深鉢の口縁部分で、口縁直下からすぐに体部に櫛歯状の工具で条線を施文する。条線は 1 単位約 10 条の条数で、後期中葉から後半にかけての粗

製土器と考えられる。

晩期のものは 56 の 1 点であり、結節をもつ縄文を施したもので、器厚が薄く、内面にはナデ調整が見られる。

B 須恵器

57 は須恵器の有台の坏で 8 世紀第 3 四半期～第 4 四半期のものと考えられ、米沢市大神窯跡や会津大戸窯跡に類似するものが見られる。内外面にロクロナデ調整をし、内面の屈曲部に浅い沈線をもつ。58 は蓋の一部で、内外面共にロクロナデ調整を施す。57 の有台坏と 58 の蓋とは、胎土や焼成の状態が似ており、セットになるものと推測される。59 は蓋で、内外面共にロクロナデ調整を施している。内面には焼成の際に降灰による自然釉が見られ、重ね焼した有台坏が貼り付いたものと考えられる跡が残る。60 は蓋のつまみ部分で内外面共にロクロナデ調整が施されている。

C 石器

石器は定型石器が 2 点出土し、その他の加工痕が認められるものもあるが、剥片に含めた。石材は全て珪質頁岩である。

61 は石笠である。剥片の背面、腹面の両面に調整加工が施され、刃部が丸みをおびている。腹面の加工は先端部の刃部に浅い加工が認められる。62 は削器である。頭頂部の先端が欠損しており、石匙のつまみ部分が欠損したものを転用したものと考えられる。三線辺が刃部として背面側に加工が施され、その内末端の一線辺に鋸歯状の調整を施している。

剥片の中で二次加工痕の認められるものが 2 点確認された。63 は腹面と背面の両面共に、全面に調整加工が施されるが、刃部を形成するような連続した加工とはなっていない。一部欠損しており、石鑿または石錐などの定型石器の未製品であると推察される。64 も二次加工が施されるが、刃部の形成には至っていない。65 は剥片であるが、両側縁と末端の一辺縁に微細な剥離痕が確認できる。66・67 共に二次的な加工の様子は見られなかった。

68 は縦長剥片で、両側縁に微細な剥離痕が確認できる。材質は他の石器と同様に頁岩であるが、その質と形状より後期旧石器時代の石刃の可能性も推察される。

V 理化学分析

1 放射性炭素年代測定（1）

山形大学
YU - AMS グループ

A はじめに

北原2遺跡出土の炭化物に対して、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。

B 試料と方法

表2に北原2遺跡出土のサンプル1点の試料情報と前処理方法を示す。測定試料は、酸・アルカリ・酸処理による前処理を行った。続いて、元素分析計、質量分析計、ガラス真空ラインより構成されるグラファイト調整システムにてサンプルのグラファイト化を行った。その後、加速器質量分析計(YU-AMS; NEC製 1.5 SDH)を用いて放射性炭素年代を測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、曆年代を算出した。

表2 測定資料および処理方法（1）

ラボコード	測定試料名	試料データ	試料状態	処理
YU-629	RP9_SD53	北原2遺跡 RP9 (SD53)	炭化物	AAA 処理 1N HCl 80 度 1時間 1N NaOH 室温 1時間 (1回) 1N NaOH 80 度 1時間 (3回) 1N HCl 80 度 1時間

表3 放射性炭素年代測定および曆年較正の結果（1）

測定番号	試料名	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	曆年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	¹⁴ C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	¹⁴ C 年代を曆年代に較正した年代範囲	
					1σ 曆年代範囲	2σ 曆年代範囲
YU-629	RP9_SD53	-25.67 \pm 0.25	3043 \pm 23	3045 \pm 25	1376BC(34.0%) 1338BC 1320BC(26.1%) 1290BC 1281BC(8.1%) 1270BC	1394BC(93.8%) 1259BC 1229BC(1.6%) 1220BC

C 結 果

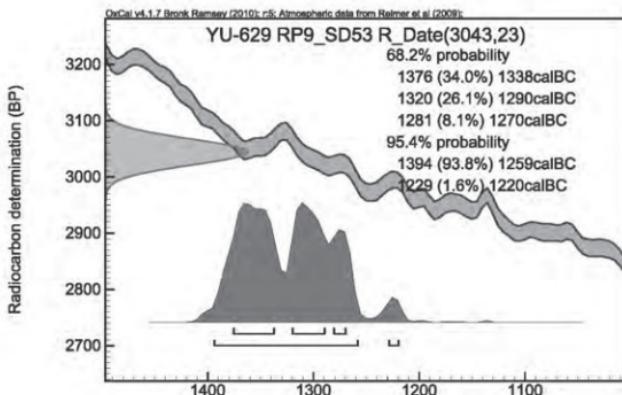
表3に北原2遺跡出土のサンプル1点の放射性炭素年代測定及び曆年較正の結果を示す。各結果には、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体 ($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って、曆年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代、¹⁴C年代を曆年代に較正した年代範囲を示す。曆年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後曆年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて曆年較正を行うために記載した。

D 年代測定の考え方

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代(yrBP)の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差($\pm 1\sigma$)は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い（¹⁴Cの半減期 5730 ± 40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。¹⁴C年代の暦年較正には OxCal14.1.7¹⁾（較正曲線データ：

Intcal10²⁾）を使用した。なお、1σ暦年代範囲は OxCal の確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する 68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ暦年代範囲は 95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。



第4図 暦年較正年代グラフ（1）

引用・参考文献

- 1) Bronk Ramsey, C. (2009). Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.
- 2) Reimer, P. J., Baillie, M. G. L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J. W., Blackwell, P. G., Bronk Ramsey, C., Buck, C. E., Burr, G. S., Edwards, R. L., Friedrich, M., Grootes, P. M., Guilderson, T. P., Hajdas, I., Heaton, T. J., Hogg, A. G., Hughen, K. A., Kaiser, K. F., Kromer, B., McCormac, F. G., Manning, S. W., Reimer, R. W., Richards, D. A., Soutouh, J. R., Talamo, S., Turney, C. S. M., van der Plicht, J., & Weyhenmeyer, C. E. (2009). IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50.000 years cal BP. Radiocarbon, 51(4), 1111-1150

2 放射性炭素年代測定（2）

株式会社 パレオ・ラボ
AMS 年代測定グループ

A はじめに

北原2遺跡より出土した試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。なお、同一試料を用いて樹種同定が行われている。

B 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表4のとおりである。試料は、縄文時代晚期と考えられているSD53から出土した炭化材1点である。試料は調製後、加速器質量分析計（山形大学、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH-1）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、歴年代を算出した。

C 結 果

表5に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って歴年較正に

用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代を、図4に歴年較正結果をそれぞれ示す。歴年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後歴年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて歴年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代（yrBP）の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、歴年較正の詳細は以下のとおりである。

歴年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い（¹⁴Cの半減期 5730±40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の歴年較正にはOxCal4.1（較正曲線データ：IntCal09）を使用した。なお、 1σ 歴年代範囲は、

表4 測定資料および処理方法（2）

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-22225	遺構：SD53 試料No.1 遺物No.38 層位：8層	種類：炭化材（クリ） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 部位：外側 2年輪分 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸：12N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：12N)

表5 放射性炭素年代測定および歴年較正の結果（2）

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	歴年較正年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	¹⁴ C年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	¹⁴ C年代を歴年代に較正した年代範囲	
				1σ 歴年代範囲	2σ 歴年代範囲
PLD-22225 試料No.1 遺物No.38	-26.81 \pm 0.17	2959 \pm 25	2960 \pm 25	1256BC(11.6%) 1237BC 1215BC(56.6%) 1129BC	1290BC(0.9%) 1281BC 1270BC(90.5%) 1111BC 1103BC(3.0%) 1074BC 1066BC(1.0%) 1056BC

OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の曆年代範囲であり、同様に 2σ 曆年代範囲は 95.4% 信頼限界の曆年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に曆年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は曆年較正曲線を示す。

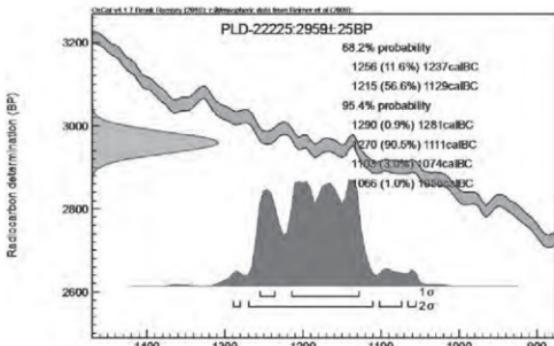
D 考 察

各試料の曆年較正結果のうち、 2σ 曆年代範囲（確率 95.4%）に注目し、結果を整理する。

北原 2 遺跡の SD53 から採取された試料 No.1 (PLD-22225) は、1290-1281BC(0.9%)、1270-1111BC(90.5%)、1103-1074BC(3.0%)、1066-

1056BC(1.0%) で、紀元前 13 世紀末～紀元前 11 世紀中頃の繩文時代晚期中葉の曆年代範囲を示した。13 世紀後半～12 世紀前半の確立が最も高く、出土土器の時期（繩文時代晚期）とも矛盾しない。

ただし木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死・伐採年代が得られるが、最終形成年輪よりも内側の年輪を測定すると、内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。北原 2 遺跡の試料 No.1 (PLD-22225) は最終形成年輪を欠く部位不明の炭化材で、古木効果の影響を受けている可能性が高く、実際の枯死・伐採年代が測定結果よりも新しい年代であった可能性がある点に注意が必要である。



第5図 曆年較正年代グラフ（2）

引用・参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の ^{14}C 年代 : 3-20, 日本国第四紀学会。
- Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer, C.E. (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50.000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, 1111-1150.

3 樹種同定

株式会社 パレオ・ラボ

A はじめに

北原2遺跡のSD53から出土した炭化材について、放射性炭素年代測定に伴って樹種同定を行なった。

B 試料と方法

試料は、SD53から出土した炭化材1点である。時期は、縄文時代晩期と考えられている。炭化材の樹種同定は、まず試料を乾燥させ、材の横断面(木口)、接線断面(板目)、放射断面(柾目)について、カミソリと手で割断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡(日本電子(株)製 JSM-5900LV)にて検鏡および写真撮影を行なった。

C 結 果

同定の結果、試料はクリであった。

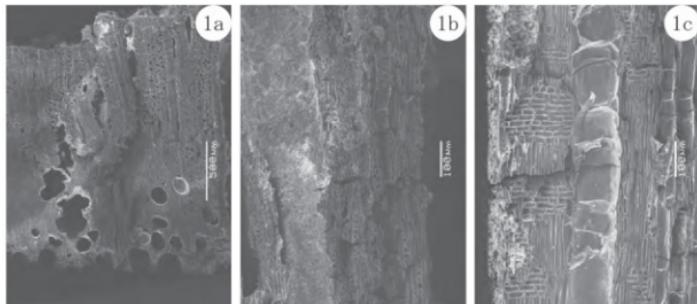
次に、同定された材の特徴を記載し、図版に走査型電子顕微鏡写真を示す。

(1) クリ *Castanea crenata Siebold et Zucc.* ブナ科

図版1 1a-1c(No.1)

年輪のはじめに大型の道管が1~3列並び、晩材部では径を徐々に減じた道管が火炎状に配列する環孔材であるが、試料の劣化が激しく、2年輪をまたぐ試料を得られなかった。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で單列となる。

クリは北海道の石狩、日高以南の温帯から暖帯にかけての山林に分布する落葉中高木の広葉樹である。材は重硬で耐朽性が高い。



1a-1c.クリ(No.1)

a:横断面、b:接線断面、c:放射断面

第6図 北原2遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

VI 総 括

1 北原 2 遺跡

北原 2 遺跡からは縄文時代後期から晩期にかけての遺物が多く出土している。これらの遺物は溝跡や土坑、倒木痕からの出土である。堅穴建物や掘立柱建物などは検出されなかった。柱穴も検出されていない。SK29 は柱穴の可能性があるが詳細は不明である。

これらのことから今回の調査区は人々が集落を営んでいた場所から離れていたと考えられる。ただ、出土遺物の量などからして人々の生活圏内であったといえる。また、遺物の殆どが溝からの出土であることを考慮すれば近隣の集落から水を求めて来た場所であるかもしれない。調査区は南側から北側にかけて傾斜しており、さらに調査区周辺は谷底のような地形をしている。周辺の丘陵地から調査区周辺へ水が流れて来ていたと考えられる。このことから検出された溝跡はこれらの水の浸食によって出来た可能性があり西側で検出されている SD25、52、53、SX36、40 さらには SX30 と SX51 の一段下がった場所は元々一つの溝跡であり上層部は後に削られ深い箇所が残った可能性もある。

いずれにせよ、今回調査した北原 2 遺跡の周辺に集落が位置していたと考えられる。調査区内の遺構の位置が西側に集中していること並びに遺物の出土も西側に多く見られることから西側斜面を登った台地状に集落があつたと考えられる。

今回調査した当遺跡は人々の生活範囲であったと考えられることから集落の縁辺部に入るといえる。

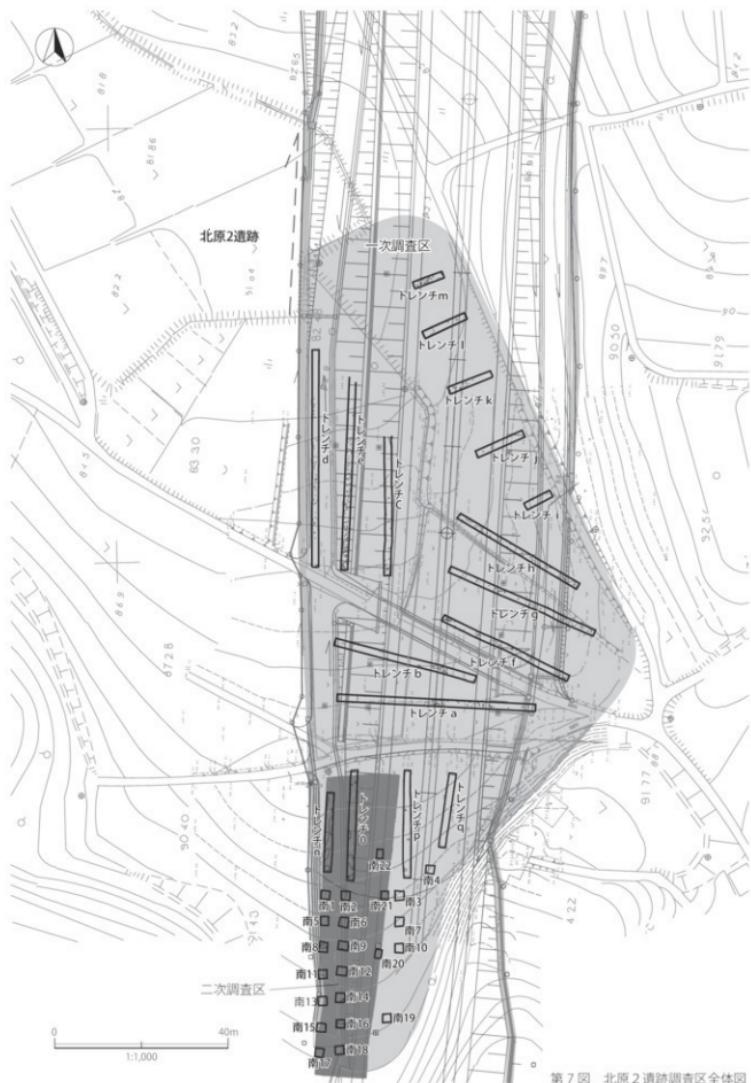
2 北原 4 遺跡

北原 4 遺跡は丘陵上に営まれた遺跡である。今回の調査では人々が暮らした住居跡などの痕跡を確認することは出来なかった。しかし遺物の面で縄文早期から晩期までと幅広い年代のものが出土しており、平安時代の須恵器なども出土している。このことから拠点的な集落ではないものの人々がこの場所において何らかの活動を続けていたことは確かである。今回の調査区は明治期以降の土地改良において造成などが行われている箇所である。北原 4 遺跡の周辺には今回調査した北原 2 遺跡や赤石遺跡などがあり、他にも縄文時代に帰属する遺跡が多くあると考えられる。そういった場所から畑を造成する際に土を運び込みその中に今回出土した遺物が混入していたとも考えられる。ただ、先に記したように調査区内は畑を造成する際に頂上部付近を地山が見えるまで削っている。トレーンチ調査でも斜面の低い場所に対し削った土を盛てながらにしている様子が確認できている。このことから今回の調査区は土を盛られたのではなく削られたところと判断することが出来る。縄文時代及び平安時代の遺構が存在していたのだが明治期以降削平されてしまい残されたわずかな遺物のみが出土したといえる。

北原 4 遺跡も当時生活していた人々の生活圏内であり集落の縁辺部であるといえる。

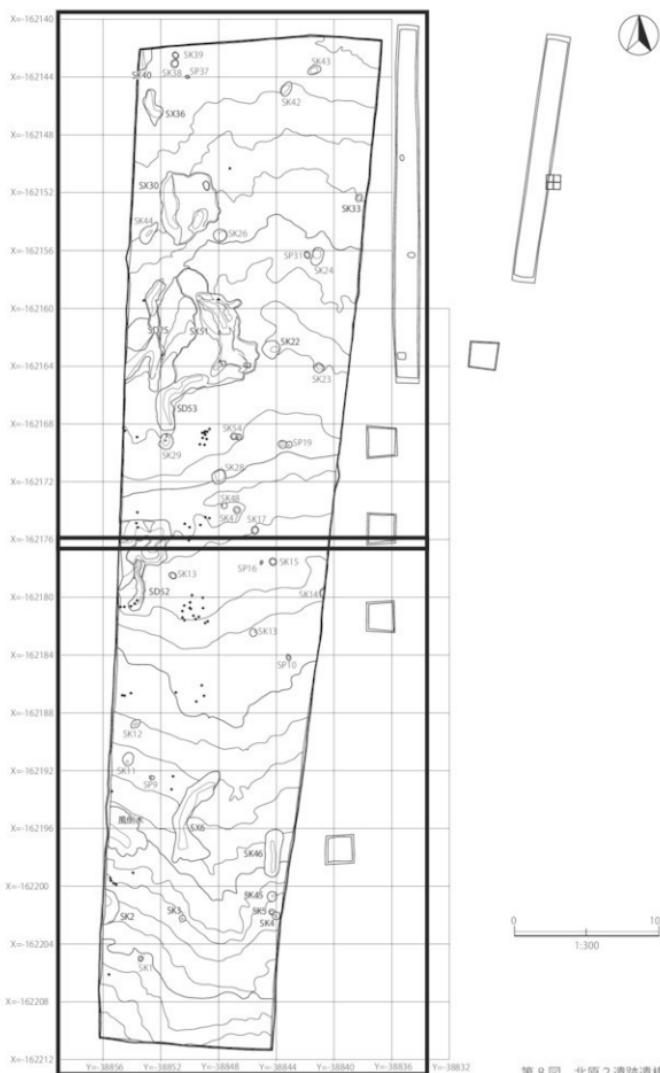
参考文献

- 村山市 1982 「村山市史 別巻 I 原始・古代編」 村山市史編さん委員会
- 岩手県盛岡市道跡の学び館 2009 「盛岡の縄文時代草創期～早崩の土器文化【資料集】」
- 山形県教育委員会 1981 「赤石遺跡北原遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第 35 集
- 山形県教育委員会 1983 「いろいろな遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第 69 集
- 山形県教育委員会 1985 「ひゅく寺遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第 92 集
- 山形県教育委員会 1989 「月ノ木 B 遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第 135 集
- 山形県埋蔵文化財センター 1995 「宮の前遺跡第 2 次発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 19 集
- 山形県埋蔵文化財センター 2003 「釜淵 C 遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 115 集
- 山形県埋蔵文化財センター 2011 「作野遺跡第 2 次発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 194 集
- 山形県埋蔵文化財センター 2012 「作野遺跡第 3 次発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 205 集

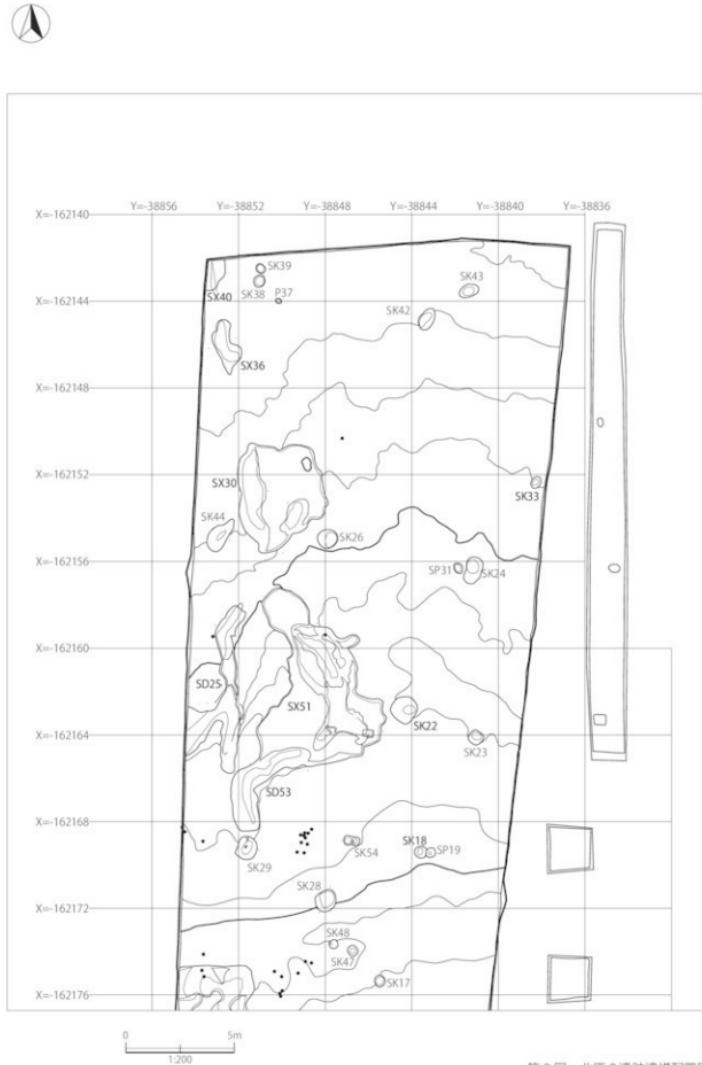


第7図 北原2遺跡調査区全体図

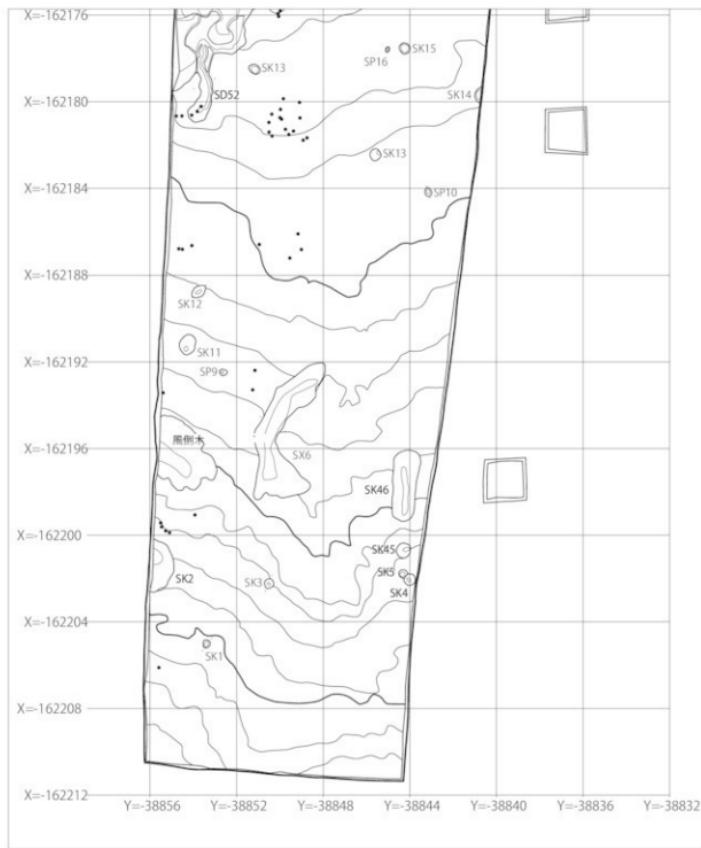
北原2遺跡



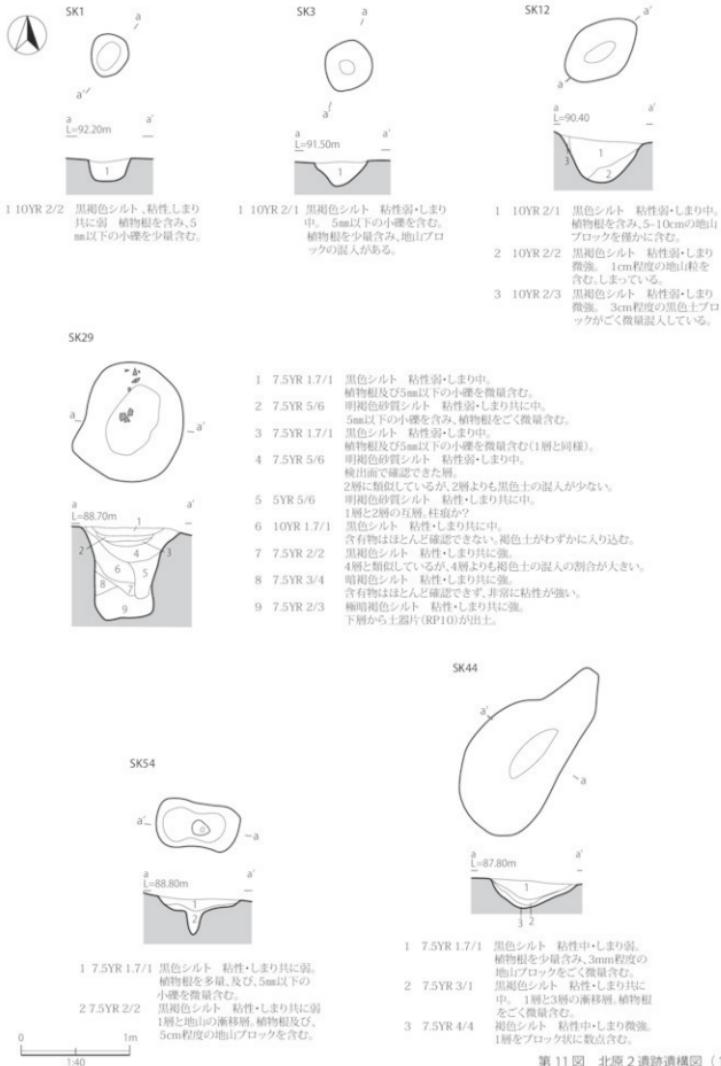
第8図 北原2遺跡遺構全体図



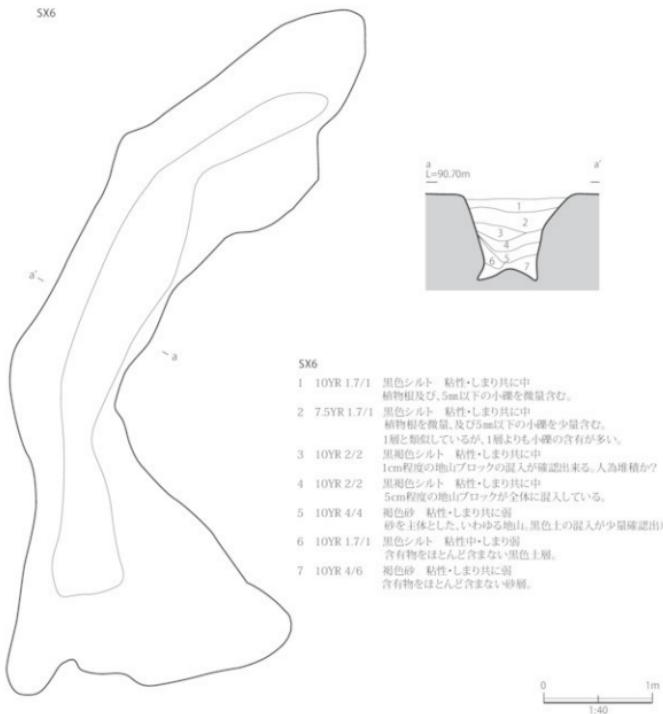
第9図 北原2遺跡遺構配置図（1）



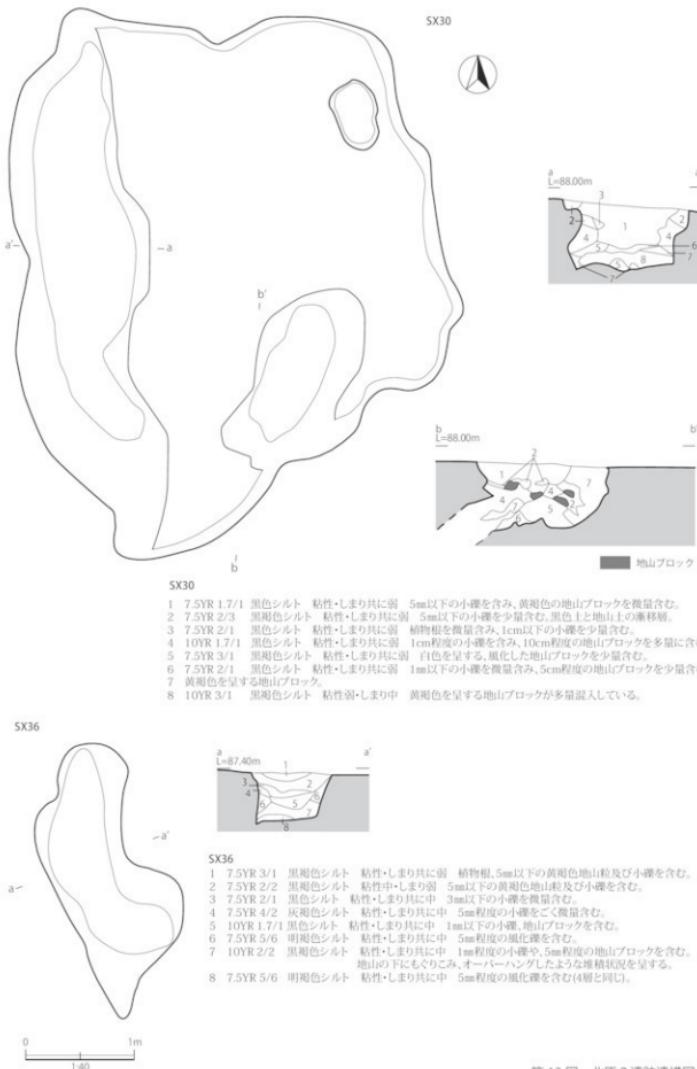
第 10 図 北原 2 遺跡遺構配置図（2）



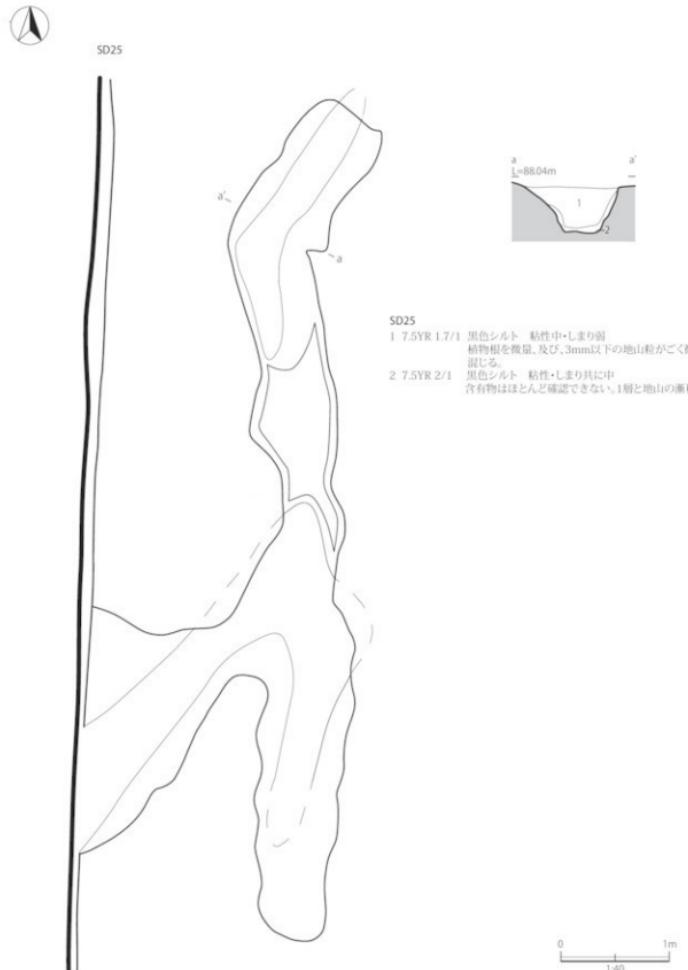
第 11 図 北原 2 遺跡遺構図 (1)



第12図 北原2遺跡遺構図(2)



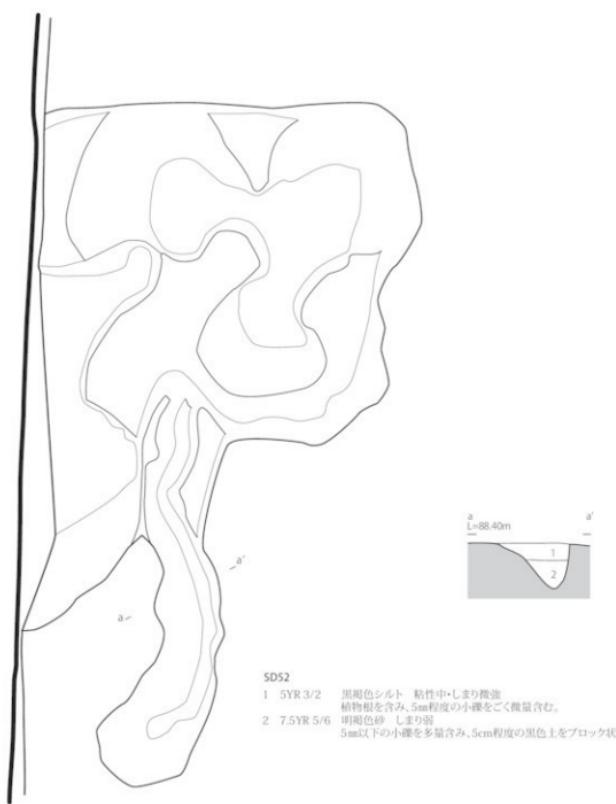
第 13 図 北原 2 遺跡遺構図 (3)



第14図 北原2遺跡遺構図(4)



SD52

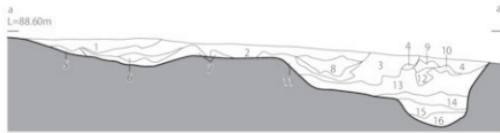


0 1m
1:40

第15図 北原 2 遺跡遺構図（5）

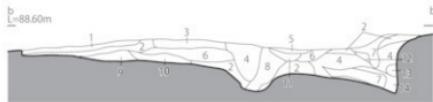


第16図 北原2遺跡遺構図(6)



SX51 a-a'

- 1 7.5YR 3/1 黒褐色シルト 粘性・しまり共に弱 植物根を多量含み、1mm以下の小礫を含む。
 2 7.5YR 2/2 黒褐色シルト 粘性・しまり共に弱 植物根を含み、黄褐色を呈した地山ブロックが数点混入している。
 3 7.5YR 5/6 明褐色シルト 粘性・しまり共に弱 植物根を少量含み、10cm以下での風化土の白色土を含む。
 4 7.5YR 2/2 黒褐色シルト 粘性・しまり共に弱 植物根を複数含み、5cm程度の風化土及び、1mm以下の小礫を含む。
 5 7.5YR 3/2 黒褐色シルト 粘性・しまり共に弱 植物根をごく微量含み、1mm以下の小礫を複数含む。
 6 7.5YR 1.7/1 黒褐色シルト 粘性・しまり共に弱 植物根を少量含み、灰白色の地山粒を含む。
 7 10YR 4/4 黒褐色シルト 粘性・しまり共に弱 植物根を微量含み、5mm程度の風化土の白色土を含む。
 8 7.5YR 1/1 黒色シルト 粘性・しまり共に弱 植物根を微量含み、5mm程度の風化土の小礫を少量含む。
 9 10YR 5/4 にじ黒褐色シルト 粘性・しまり共に弱 地山が露出したと思われる白色土が、ブロック状に混入している。
 10 7.5YR 3/1 黑褐色シルト 粘性・しまり共に弱 植物根を微量含み、5mm程度の風化土の白色土を含む。
 11 7.5YR 3/2 黑褐色シルト 粘性・しまり共に弱 植物根を微量含み、1mm以下の小礫をごく微量含む。黄褐色を呈する地山粒を少量含む。
 12 10YR 2/2 黑褐色シルト 粘性・しまり共に弱 黑褐色とのブロック、黄褐色の地山をブロック状に含む。
 13 7.5YR 5/8 黑褐色ブロック 粘性・しまり共に弱 地山粒を含む。
 14 10YR 1.7/1 黑色シルト 粘性・しまり共に弱 SD53の堆積土と思われる。RP16の包含層。
 15 7.5YR 3/3 明褐色シルト 粘性・しまり共に弱 黏土質の地山と黒色土の互層。固く固まつておらず、グライ化したと思われる白色粘土を少量含む。
 16 7.5YR 1.7/1 黑色シルト 粘性・しまり共に中 14層に類似しているが、14層よりも地山の混入が多い。



SX51 b-b'

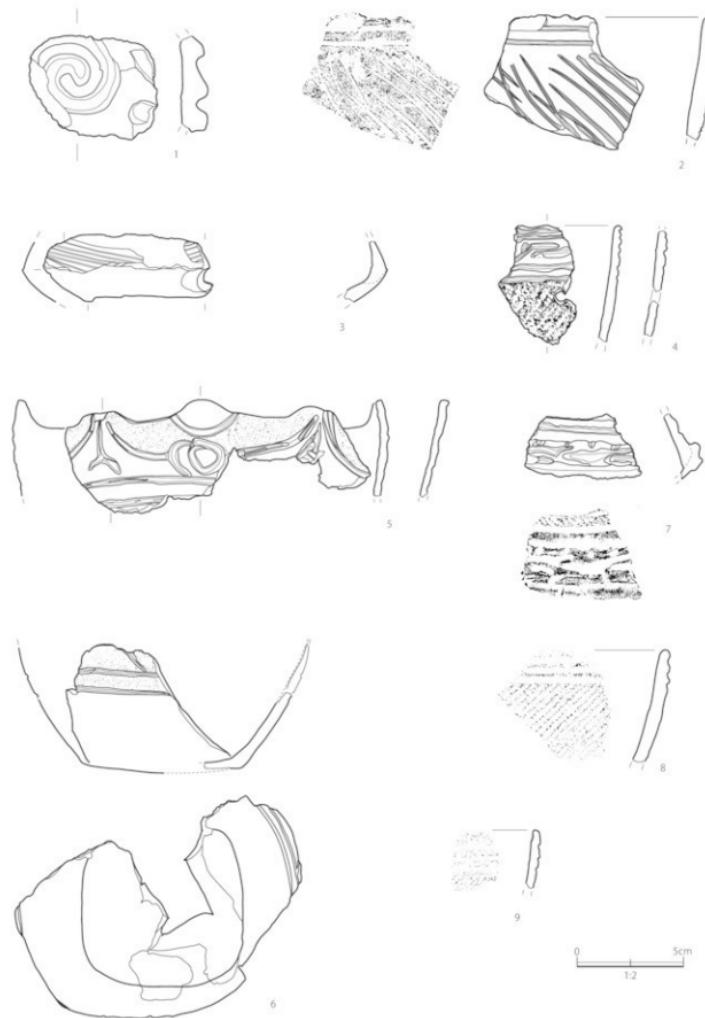
- 1 10YR 2/2 黒褐色シルト 粘性・しまり共に弱 植物根を多く含み、3cm程度の小礫を少量含む。
 2 10YR 4/4 黑褐色シルト 粘性・しまり共に弱 植物根を含み、5mm以下の小礫を少量含み、黒色土のブロックが微量見られる。
 3 7.5YR 3/1 黑褐色シルト 粘性・しまり共に弱 5mm以下での風化土の白色土を含む。遺物の混合が確認された。
 4 風例木山東の地山ブロック
 5 7.5YR 2/2 黒褐色シルト 粘性・しまり共に弱 植物根を微量含む。植物根を複数含む。
 6 7.5YR 1.7/1 黑色シルト 粘性・しまり共に弱 植物根を含み、1cm以下での小礫を微量含む。
 7 10YR 1.7/1 黑色シルト 粘性・しまり共に弱 植物根を含み、5mm以下での風化土の白色土を含む。遺物が混入される。
 8 10YR 5/8 黄褐色砂質シルト 粘性・しまり共に弱 風例木山東の地山ブロック。黄白色の粘土をブロック状に含む。
 9 10YR 5/6 黄褐色シルト 粘性・しまり共に弱 3cm以下の小礫を含み、かたこまる。植物根に由来すると思われる黒色土のブロックが数点認める。
 10 2/2 黑褐色シルト 粘性・しまり共に弱 植物根を微量に含み、1cm程度の風化土の白色土を数点含む。6層より地山ブロックの含有が多い。
 11 7.5YR 3/2 黑褐色シルト 粘性・しまり共に弱 5層と類似しているが、5層よりも大型の地山粒及び、地山ブロックが認める。
 12 7.5YR 3/2 黑褐色シルト 粘性・しまり共に弱 5cm以下の地山ブロックを含む。
 13 10YR 1.7/1 黑色シルト 粘性・しまり共に弱 5cm以下の地山ブロックを少量含む。
 14 7.5YR 3/3 暗褐色シルト 粘性・しまり共に弱 黑色土と地山土の互層。白色土が粘土質のブロックを数点含む。



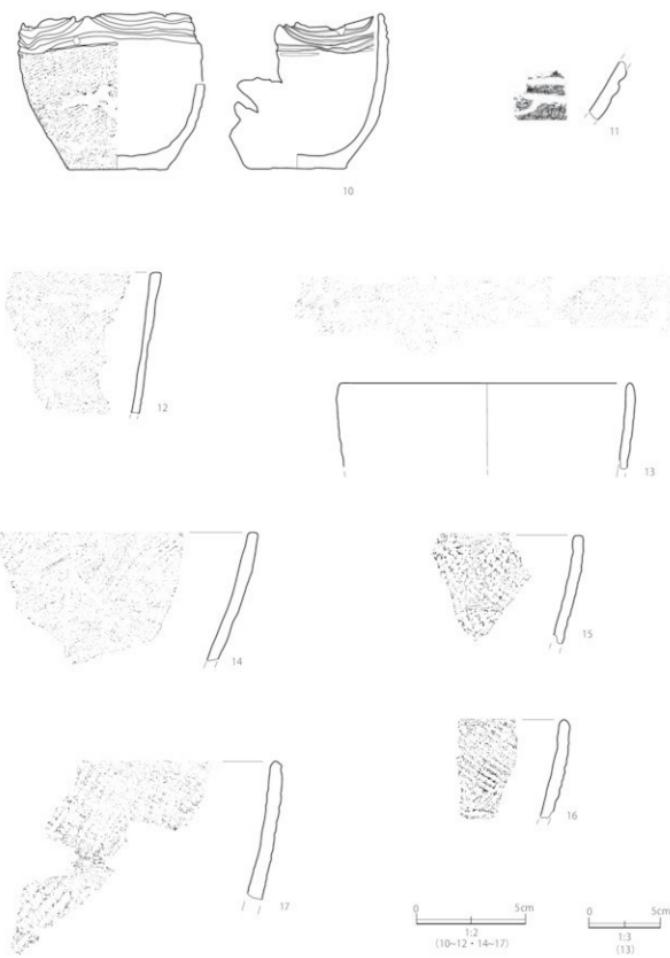
SD53

- 1 7.5YR 2/2 黒褐色シルト 粘性・しまり共に弱 植物根及び1mm程度の小礫を含み、炭化物を微量に含む。
 2 7.5YR 3/2 黑褐色シルト 粘性・しまり共に弱 植物根を微量含み、1mm以下の小礫を少量含む。
 3 7.5YR 1.7/1 黑色シルト 粘性・しまり共に弱 植物根を微量含み、10cm程度の地山ブロック及び、1cm程度の地山粒を含む。
 4 7.5YR 5/8 明褐色シルト 粘性・しまり共に中 3~5cm程度の風化土を含み、2cm程度の黑色土ブロックを少量含む。
 5 7.5YR 1.7/1 黑色シルト 粘性・しまり共に中 5cm程度の地山粒を微量含む。遺物含む。
 6 7.5YR 2/1 黑色シルト 粘性・しまり共に弱 1cm程度の風化土を数点含む。地山土中に陥落に入り込んでいる黒色土。
 7 7.5YR 2/1 黑褐色シルト 粘性・弱・しまり共に弱 1mm程度の小礫及び、地山粒を少量含み、10cm程度の地山ブロックを含む。遺物包含層。
 8 7.5YR 2/1 黑色シルト 粘性・微強・しまり弱 10cm程度の地山ブロックを含み、炭化物をごく微量含む。遺物包含層。
 9 7.5YR 4/3 黑色シルト 粘性・弱・しまり共に弱 黑色土と地山土の互層。白色土が粘土質のブロックを数点含む。
 10 7.5YR 2/3 暗褐色シルト 粘性・弱・しまり弱 黑色土と地山土の互層。9層と酷似。遺物包含層RP11が上。

第17図 北原2遺跡遺構図(7)

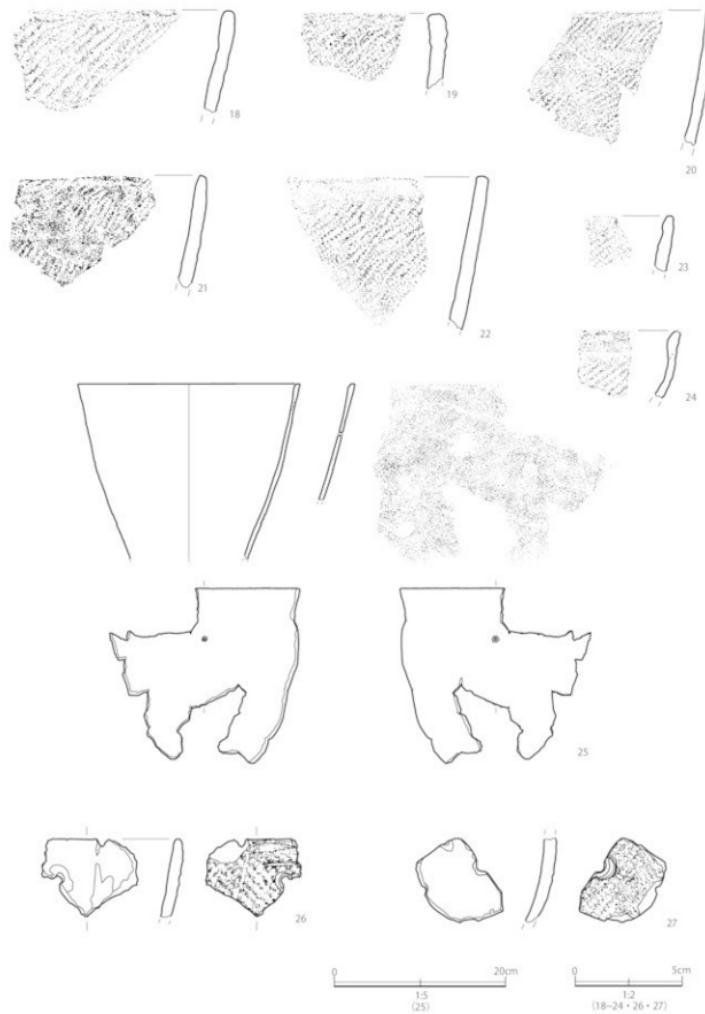


第 18 図 北原 2 遺跡遺物実測図（1）

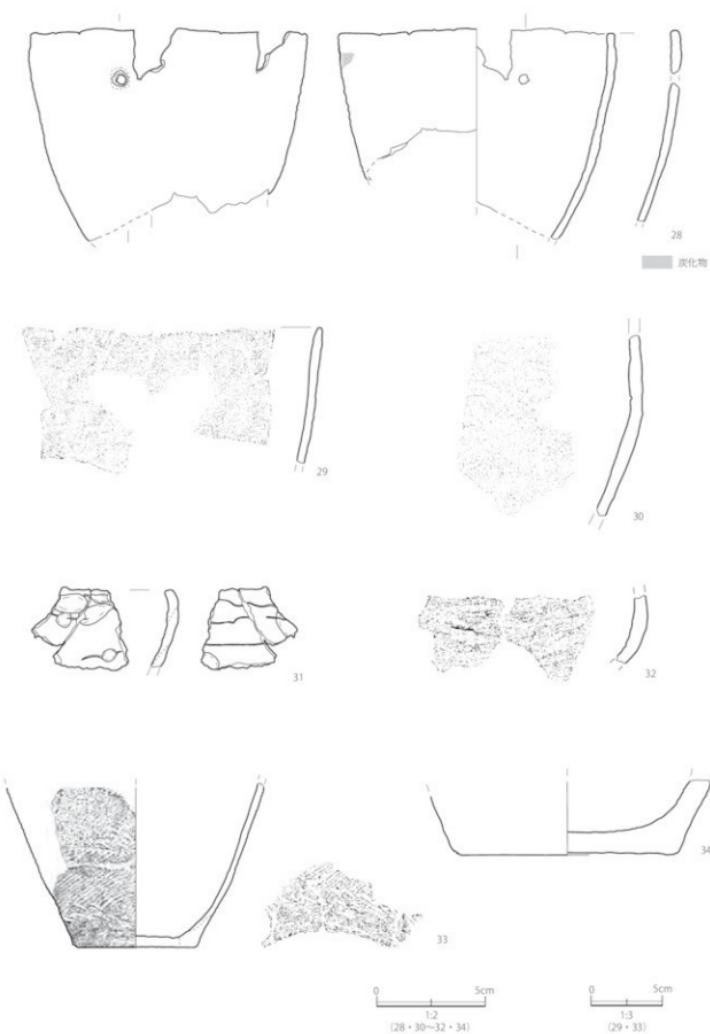


第19図 北原2遺跡遺物実測図(2)

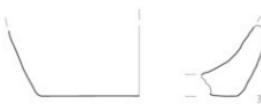
北原 2 遺跡



第 20 図 北原 2 遺跡遺物実測図 (3)



第 21 図 北原 2 遺跡遺物実測図 (4)



35



36



37



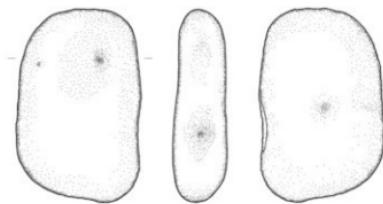
38



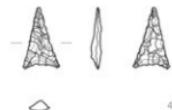
39



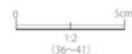
40



42

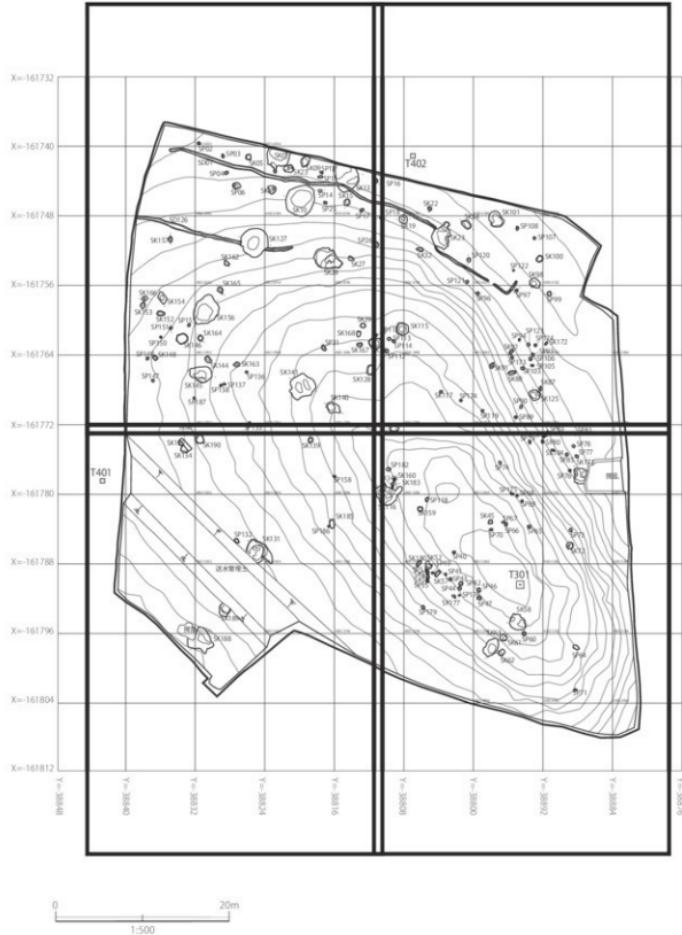


41

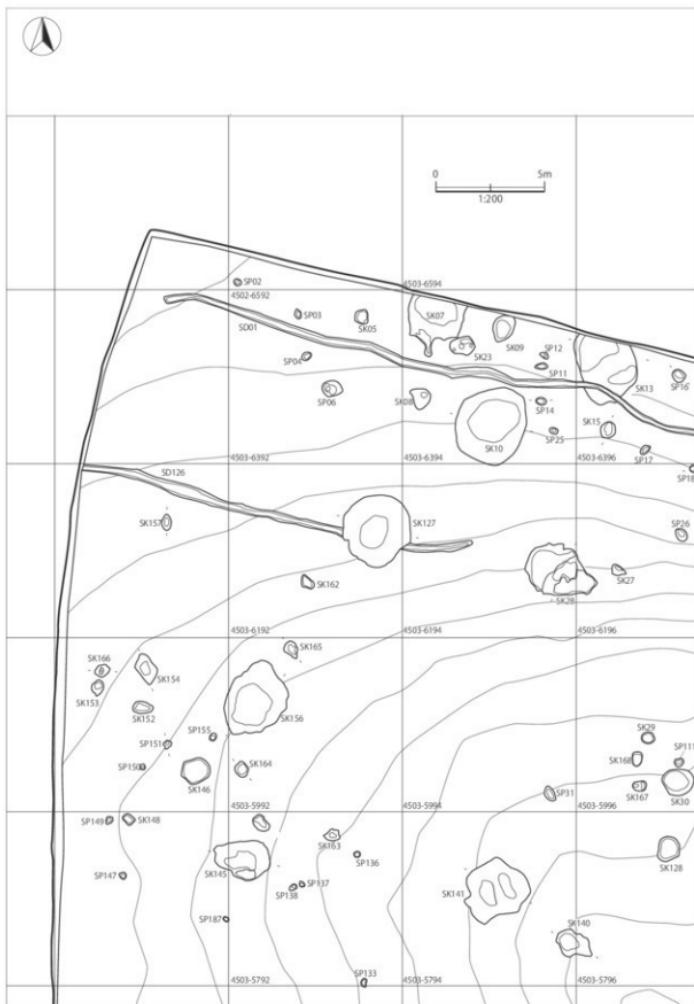


第 22 図 北原 2 遺跡遺物実測図 (5)



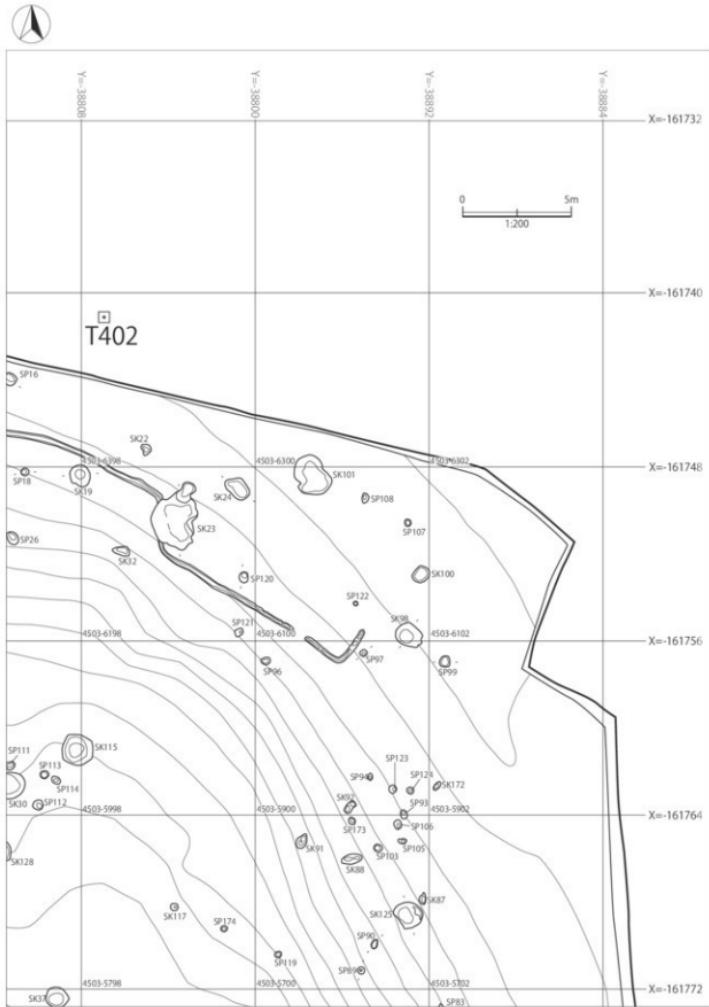


第24図 北原4遺跡遺構全体図

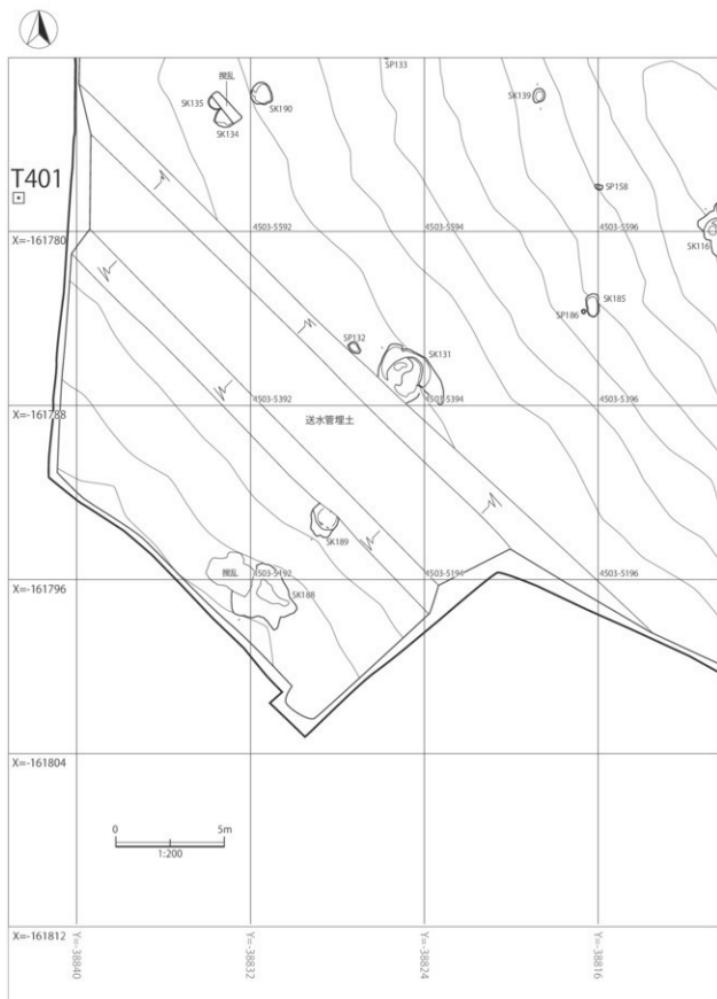


第25図 北原4遺跡遺構配置図(1)

北原 4 遺跡

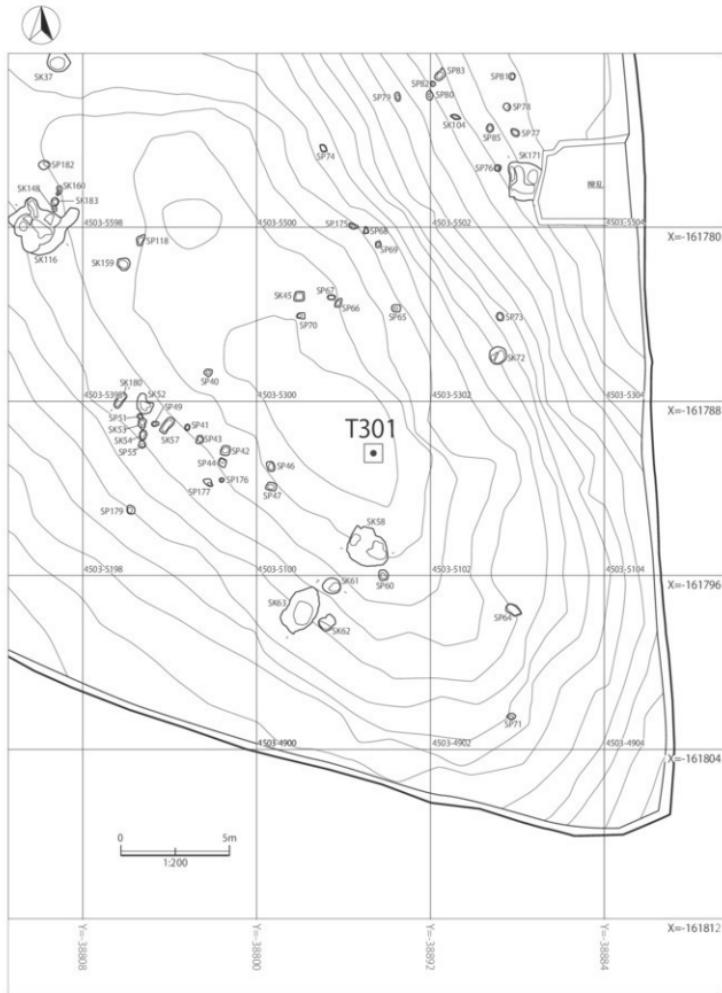


第26図 北原4遺跡遺構配置図（2）

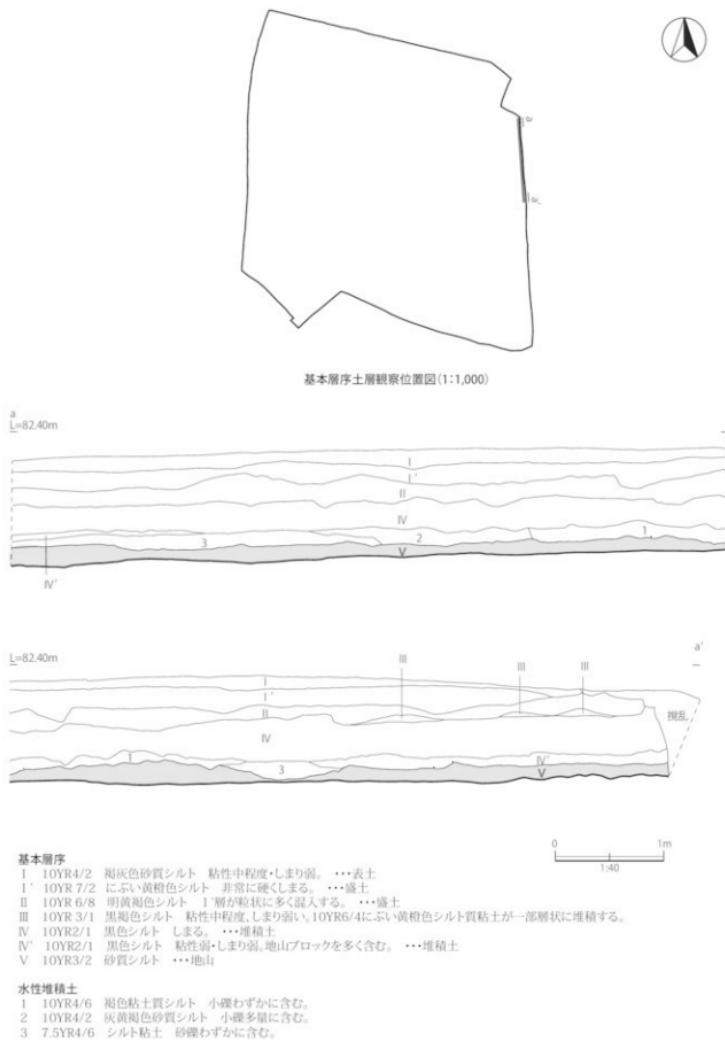


第27図 北原4遺跡遺構配置図(3)

北原 4 遺跡

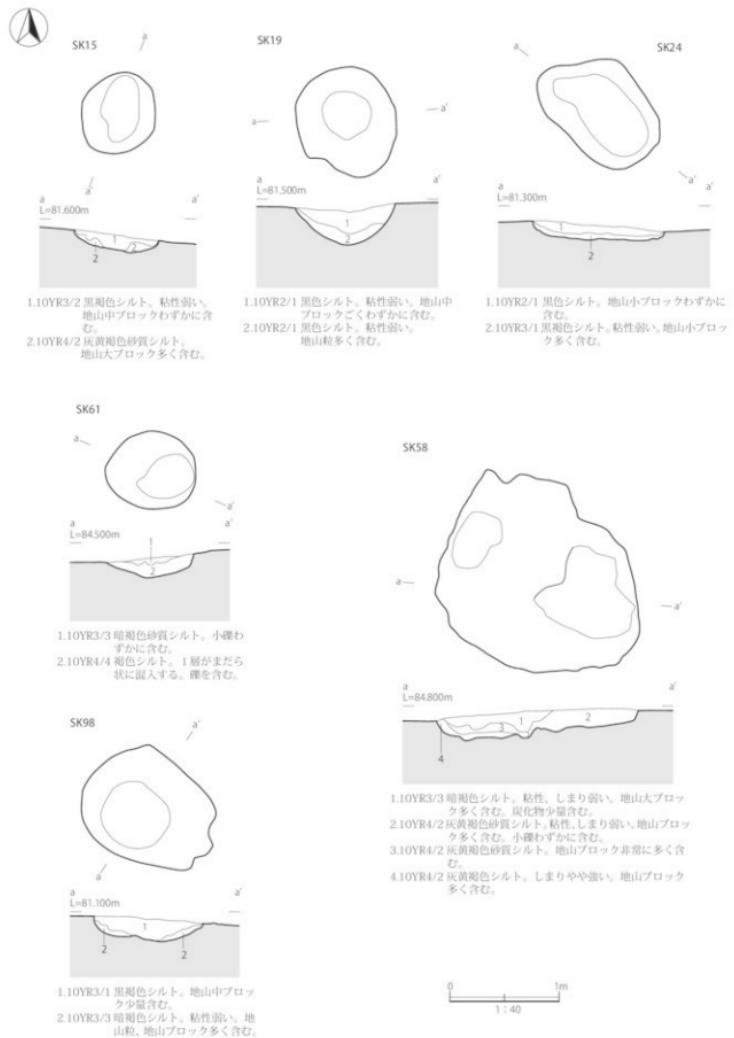


第28図 北原4遺跡遺構配置図(4)

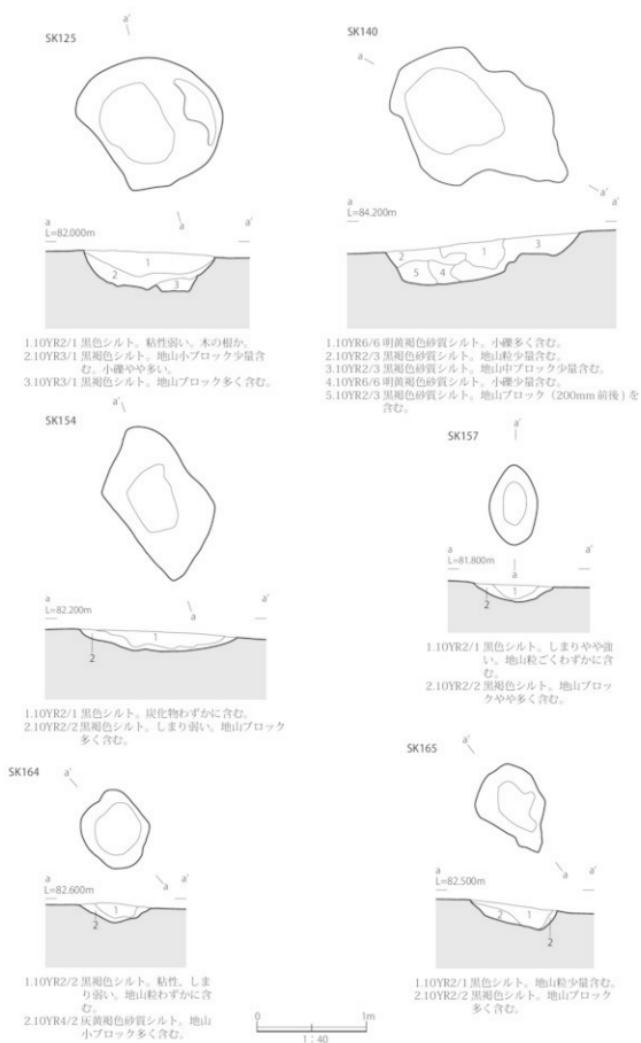


第 29 図 北原 4 遺跡基本層序

北原4遺跡



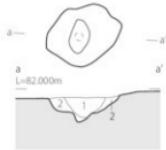
第30図 北原4遺跡遺構図（1）



第 31 図 北原 4 遺跡遺構図 (2)

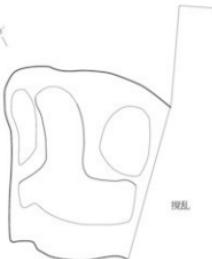


SK166



- 1.10YR2/1 黒色シルト。粘性弱い。地山粒少含む。
2.10YR2/2 黒褐色シルト。地山中プロック少含む。

SK171



複数

1.10YR2/1 黒色シルト。地山プロック（最大 50mm）がやや多く混入する。
2.10YR2/2 黒色シルト。地山小プロックわずかに混入する。
3.10YR4/2 灰褐色シルト。粘性弱い。地山中プロック多く含む。

SK189



- 1.10YR2/1 黒色シルト。地山プロック（20 ~ 100mm）を多く含む。
地山粒多く含む。
2.10YR2/1 黒褐色シルト。地山小プロック少含む。

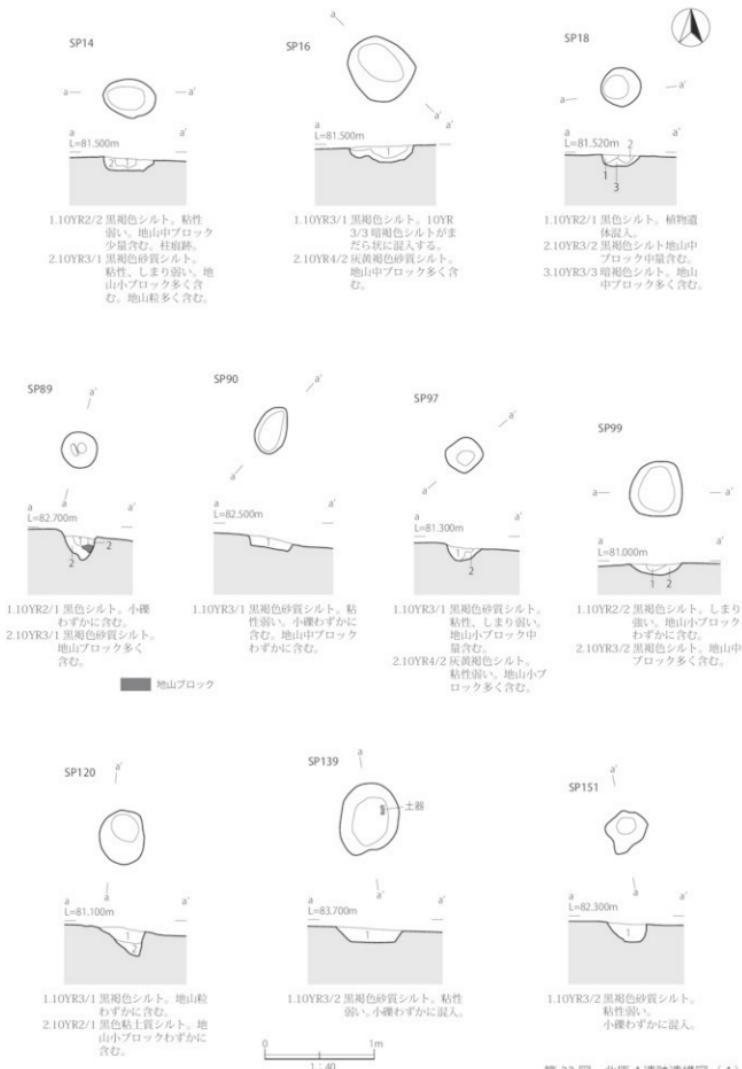
SK180



- 1.10YR2/2 黒褐色シルト。地山小プロック少含む。炭化物わずかに含む。
2.10YR2/2 黑褐色シルト。地山粒わずかに含む。
3. 地山崩落上

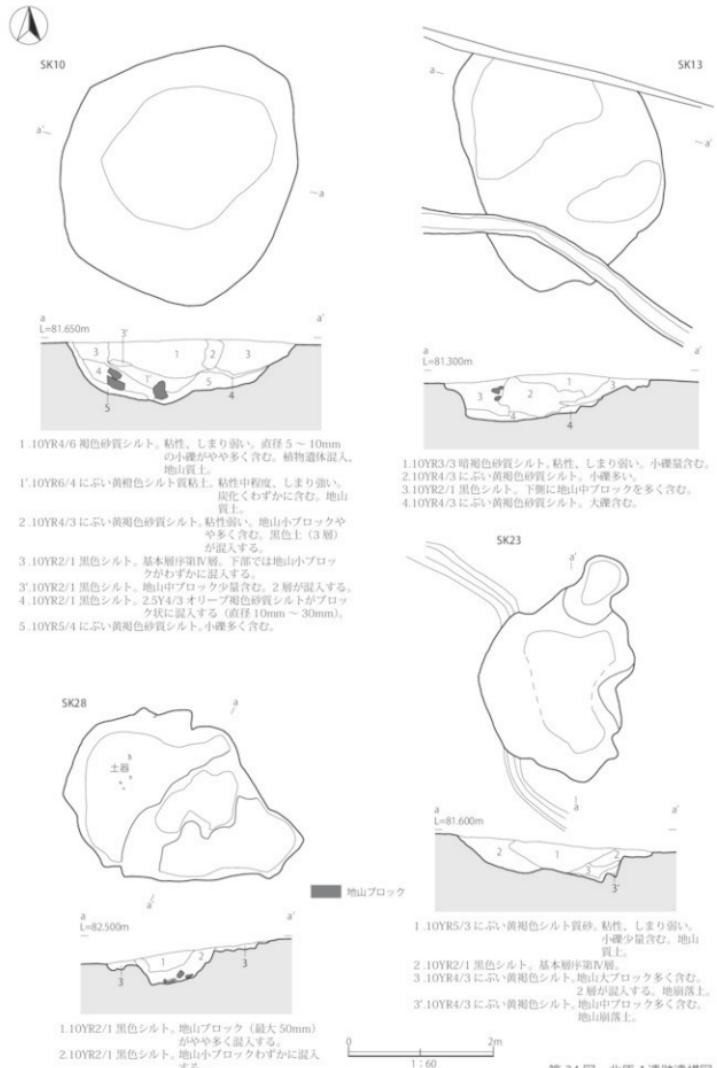
0 1m
1:40

第 32 図 北原 4 遺跡遺構図（3）

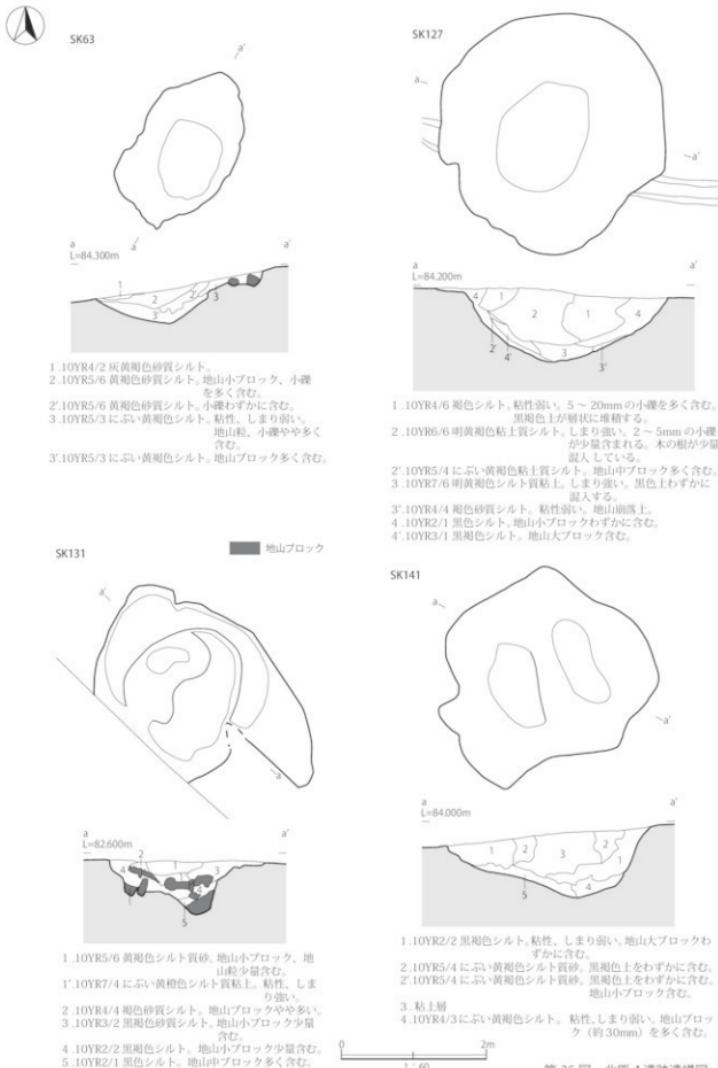


第33図 北原4遺跡遺構図(4)

北原 4 遺跡

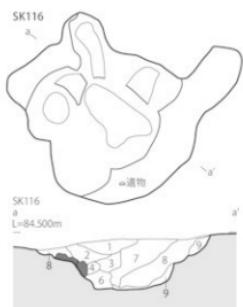
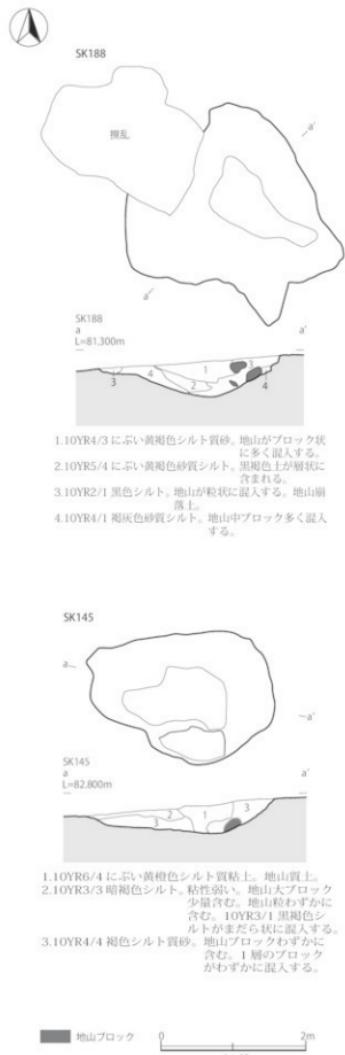


第 34 図 北原 4 遺跡遺構図 (5)



第35図 北原4遺跡遺構図(6)

北原 4 遺跡



SK156
a-a'

SK156
a-a'
L=82.600m

1.10YR3/2 黒褐色砂質シルト。地山小ブロックを含む。木の根が混入する。
2.2.5YR6/4 にぶい黄褐色シルト質砂。地山小ブロックわずかにむ。小礫わずかに含む。
3.10YR6/4 にぶい黄褐色シルト質粘土上。黒褐色土がわずかに混入する。
4.10YR3/2 黑褐色砂質シルト。地山大ブロック多く混入。
5.10YR3/1 黑褐色シルト。地山小ブロックわずかに含む。

第 36 図 北原 4 遺跡遺構図 (7)



第37図 北原4遺跡遺物実測図(1)



53



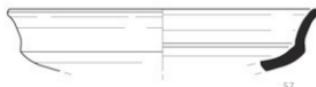
54



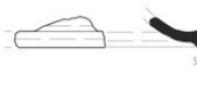
55



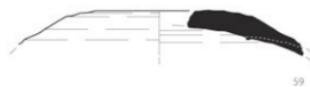
56



57



58



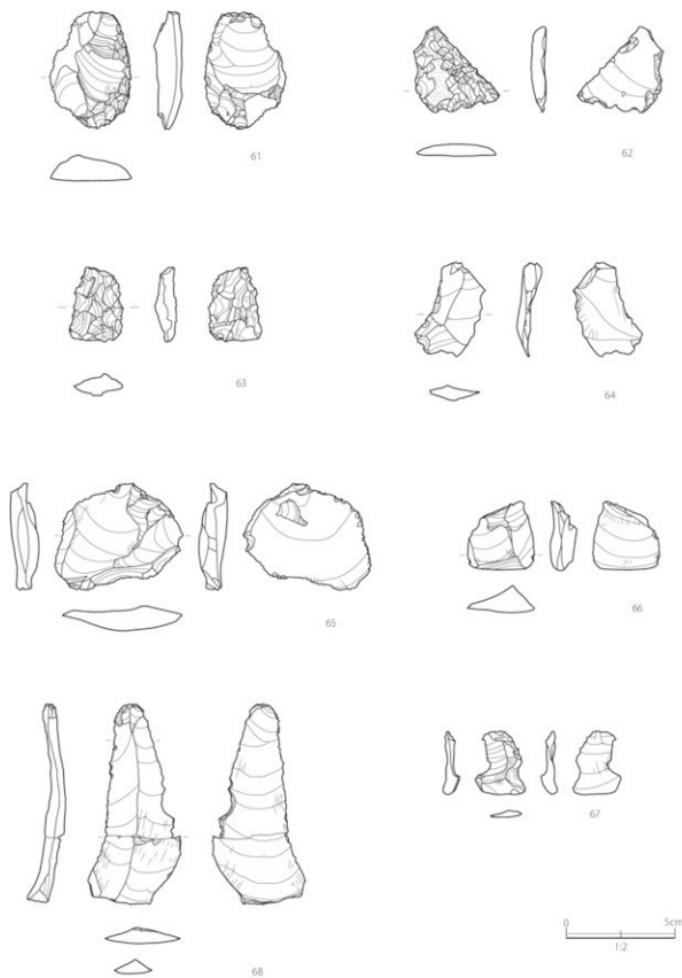
59



60



第38図 北原4遺跡遺物実測図(2)



第39図 北原4遺跡遺物実測図(3)

表 6 北原 2 遺跡縄文土器観察表

図版 番号	遺物 No.	遺構 (出土地点)	器種	法量 (mm)				施文	地文	備考	
				口径	最大径	底径	器高				
1	SX51	深鉢	—	—	—	(45)	6	連結溝巻文	RL	RP3	
2	SX30	深鉢	—	—	—	(57)	8	—	—	—	
3	SD25	口上器	—	(170)	—	(28)	6	—	無文	被熱により表面剥離	
4	SD53	鉢	—	—	—	(55)	4	入組二叉文	LR	体部に補修孔	
18	5	SD53	深鉢	170	176	—	(45)	4	三叉文・レンズ状文	LR	RP8・9
6	SD53	壺	—	(136)	74	(59)	5	横帯文	LR	RP7・13、方形平底	
7	SX30	口上器	—	—	—	(30)	5	入り組み文	—	—	
8	SD53	鉢	—	—	—	(52)	7	平行模線(3条)	LR	外面に炭化物付着	
9	トレンチ	鉢	—	—	—	(27)	4	平行模線(3条)	LR	—	
10	X-O	小型鉢	76	84	23	71	4	変形丁字文	LR	—	
11	SK48	浅鉢	—	—	—	22	6	変形丁字文	—	—	
12	SD53	深鉢	—	—	—	(97)	8	—	LR	外面に炭化物付着	
19	13	SD53	深鉢	199	—	—	(59)	7	—	RL	—
14	SD53	深鉢	—	—	—	(58)	6	—	LR	内面ミガキ調整	
15	トレンチ	深鉢	—	—	—	(50)	5	—	RL	—	
16	SK18	深鉢	—	—	—	(42)	6	—	RL・LR(引抜)	—	
17	トレンチ	深鉢	—	—	—	(63)	7	—	LR	—	
18	5487	深鉢	—	—	—	(47)	6	—	LR	19と同一個体	
19	5487	深鉢	—	—	—	(35)	6	—	LR	18と同一個体	
20	X-O	深鉢	—	—	—	(63)	7	—	LR	RP12	
21	SX51	深鉢	—	—	—	(50)	7	—	LR	RP12	
20	22	SX28	深鉢	—	—	—	(71)	7	—	LR	—
23	SX51	鉢	—	—	—	(26)	6	—	LR	—	
24	SX51	鉢	—	—	—	(31)	4	—	LR	—	
25	X-O	深鉢	260	—	—	(205)	5	—	LR	体部に補修孔	
26	トレンチ	鉢	—	—	—	(36)	6	—	RL	体部に補修孔	
27	トレンチ	鉢	—	—	—	(39)	6	—	LR	体部に補修孔	
28	X-O	深鉢	170	—	—	(145)	6	—	無文	体部に補修孔	
29	SD53	深鉢	145	—	—	(93)	7	—	無文	内外面共にナデ調整	
30	SD53	壺	—	—	—	(81)	6	—	無文	一部にLR範囲	
21	31	SX51・SD53	小型土器	—	—	(35)	5.5	—	無文	手づくね土器、指圧痕が明顯に残る	
32	SX51・SD53	壺	—	—	—	(36)	8	—	無文	—	
33	SK29	深鉢	—	(178)	82	(113)	5	—	LR	RP11	
34	SK46	深鉢	—	(132)	98	(34)	10	—	—	RP1	
35	SX51	深鉢	—	(120)	90	(30)	8	—	—	—	
36	SX30	鉢	—	(112)	80	(25)	6	—	—	—	
22	37	SD53	深鉢	—	(100)	63	(38)	5	—	—	RP14,16、指圧痕、上げ底
38	SX51	鉢	—	(68)	43	(13)	5	—	—	上げ底	
39	SX30	鉢	—	(64)	52	(15)	3	—	—	上げ底	
40	SD53	台付鉢	—	—	—	(21)	7	—	LR	—	

表 7 北原 2 遺跡石器・石製品観察表

図版 番号	遺物 No.	遺構 (出土地点)	種別	材質	法量 (mm)			重量 (g)	備考
					長	幅	厚		
22	41	SX51	石鏃	頁岩	23	17	4.5	1.1	RQ15
42	X-O	鐸	安山岩	134	86	36.5	670	—	背面に磨り痕

表8 北原4遺跡縄文土器観察表

団版 番号	遺構 (出土地点)	器種	法量 (mm)				施文	地文	備考
			口径	最大径	底径	器高			
43	SK28	鉢	—	—	—	(19)	6	重眉山形押型文	—
44	X-O	深鉢	—	—	—	(25)	8	橋子口状沈線文	内面ナデ調整
45	4903-6100	深鉢	—	—	—	(40)	8	円形刺突文・沈線文	胎上に攝離を含む
46	SP139	深鉢	—	—	—	(51)	11	円形刺突文	貝殻条痕文 胎上に攝離を含む
47	SK10	深鉢	—	—	—	(51)	9	—	羽状
37	X-O	深鉢	—	—	—	(45)	11	0段多条LR (羽状)	胎上に攝離を含む
49	4903-5506	深鉢	—	—	—	(43)	7.5	網目状捺系文	—
50	X-O	鉢	—	—	—	(73)	7	—	LR
51	SK28	深鉢	—	—	—	(26)	9	沈線文	LR
52	X-O	小型鉢	—	—	—	(24)	5	連結済唇文	RL
53	4903-6100	深鉢	—	—	—	(30)	6.5	横帯文	R
38	54	4903-5102	深鉢	—	—	(34)	7	磨消彫文	LR
55	4903-6198	深鉢	—	—	—	(29)	6.5	柳葉状条痕文	—
56	X-O	鉢	—	—	—	(40)	6	—	LR

表9 北原4遺跡須恵器観察表

団版 番号	遺構 (出土地点)	器種	法量 (mm)				調整		備考
			口径	最大径	底径	器高	内面	外面	
57	X-O	有台环	142	—	—	(28)	ロクロナデ	ロクロナデ	RPI
58	X-O	蓋	—	—	—	(13)	ロクロナデ	ロクロナデ	—
38	59	X-O	蓋	—	(130)	—	ロクロナデ	ロクロナデ	内面に自然輪、重ね崩痕
60	X-O	蓋	—	(44)	—	(15)	ロクロナデ	ロクロナデ	—

表10 北原4遺跡石器・石製品観察表

団版 番号	遺構 (出土地点)	種別	材質	法量 (mm)			重量 (g)	備考
				長	幅	厚		
61	X-O	石鋸	珪質頁岩	54	36	12	23.9	—
62	X-O	削器	頁岩	40	36	6	8.8	鐵箇縁、石造からの転用品
63	5798	剥片	頁岩	34	24	10	6.1	二次加工痕、定型石器の未製品
39	64	X-O	剥片	頁岩	44	28	8	7.5
65	SK58	剥片	珪質頁岩	49	55	13	30.7	微細剝離痕
66	X-O	剥片	頁岩	32	31	11	8.5	—
67	X-O	剥片	頁岩	29	19	6	2.1	—
68	X-O	剥片	珪質頁岩	(91)	35	9	23.7	—

写真図版



トレンチ調査区完掘全景(北から)



トレンチh完掘状況(西から)



トレンチi完掘状況(南西から)



トレンチe完掘状況(南東から)



トレンチk完掘状況(南西から)



トレンチg完掘状況(北西から)



トレンチp完掘状況(南から)

北原 2 遺跡



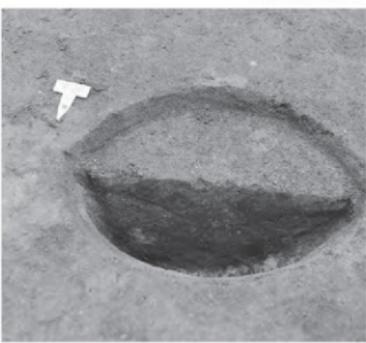
SK29 断面 (北から)



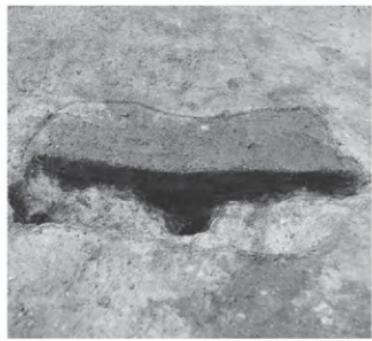
SK29 完堀 (南から)



遺物 No. 11 出土状況 (SK29 東から)



SP10 断面 (東から)



SK54 断面 (北から)



SK54 完堀 (西から)



SX6 断面（北から）



SX30 遺物出土状況（東から）



SX30 東西断面（北西から）



SX30 南北断面（北東から）



SX36 断面（北から）



SD25 断面（北から）



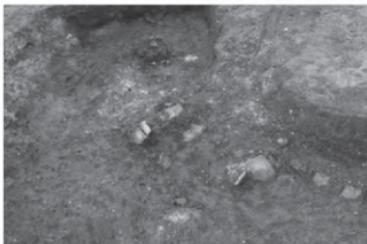
SDS2 断面（北から）



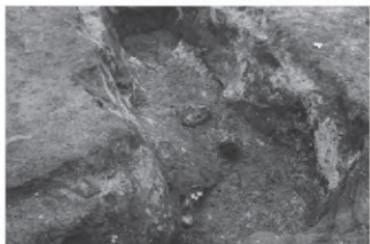
SD53 上層遺物出土状況（北西から）



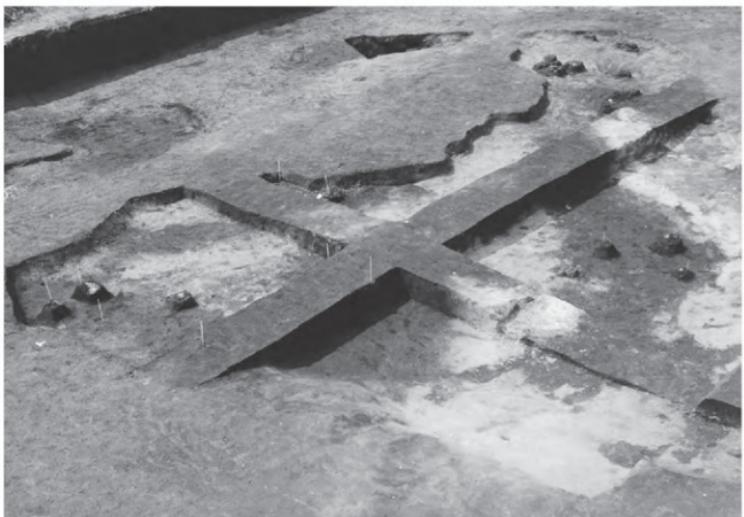
SD53 上層遺物出土状況（近景：北西から）



SD53 上層遺物出土状況（近景：北西から）



SD53 下層遺物出土状況（北西から）



SX51 遺物出土状況（南東から）



SX51 東西断面（南西から）



SX51 南北断面（南東から）



遺物No. 34 出土状況（北から）



遺物No. 8 出土状況（北西から）



縄文土器



縄文時代晩期土器



縄文土器（中期・後期）



縄文土器（晩期）

縄文土器（晩期）



10



25

縄文土器（粗製）



6

方形平底土器



13

縄文土器（粗製）



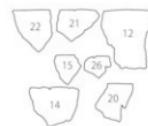
33

縄文土器（粗製）



28

縄文土器（粗製）



縄文土器（粗製）



縄文土器（粗製）



縄文土器（粗製）



29

縄文土器（粗製）

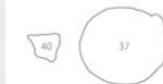
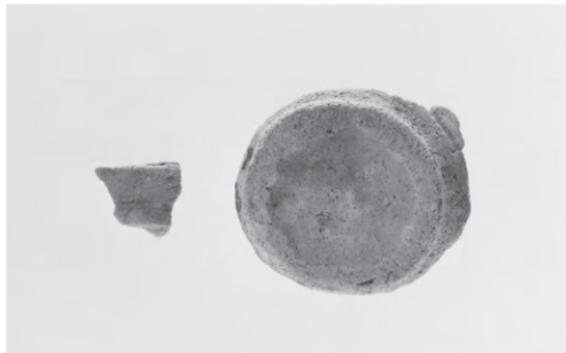


縄文土器（粗製）



34

縄文土器（粗製）

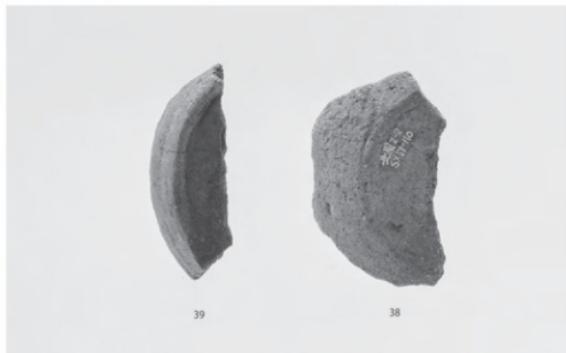


縄文土器（粗製）



36

縄文土器（粗製）



縄文土器（粗製）



縄文土器（粗製）

30



41

石鏃



石器

42

北原 4 遺跡



トレンチ調査区実掘全景(南から)



トレンチ 11 (西から)



トレンチ 13 (西から)



トレンチ③ (南から)



トレンチ② (北から)



SK15 削面 (東から)



SK19 削面 (南から)



SK24 削面 (南から)



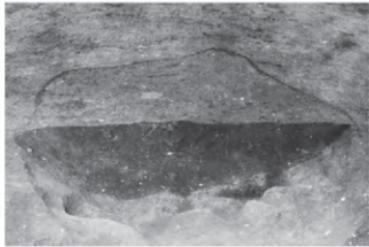
SK58 削面 (南から)



SK61 削面 (南から)



SK98 削面 (東から)



SK125 削面 (東から)



SK140 削面 (南から)

北原 4 遺跡



SK154 断面 (北東から)



SK157 断面 (北東から)



SK165 断面 (北から)



SK166 断面 (南から)



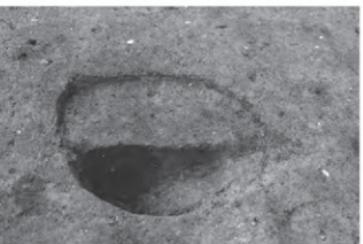
SK171 断面 (東から)



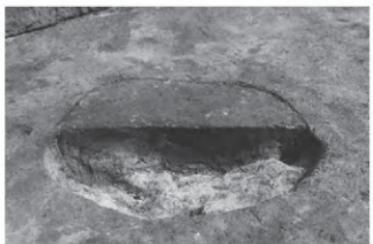
SK189 断面 (東から)



SP14 断面（南から）



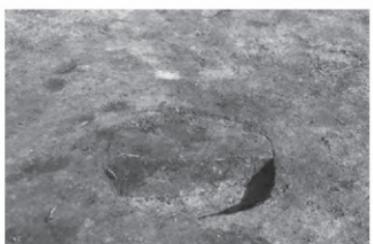
SP97 断面（東から）



SP16 断面（南から）



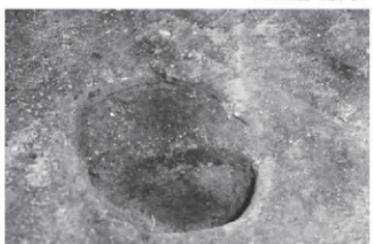
SP99 断面（南から）



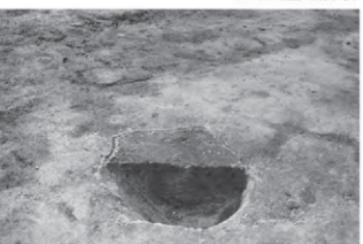
SP18 断面（南から）



SP120 断面（東から）



SP89 断面（東から）



SP151 断面（東から）



倒木痕 SK10 断面（北西から）



倒木痕 SK13 断面（南から）



倒木痕 SK28 断面（北から）



倒木痕 SK23 断面（東から）



倒木痕 SK63 断面（南東から）



倒木痕 SK127 断面（北東から）

北原 4 遺跡



倒木痕 SK131 断面（北東から）



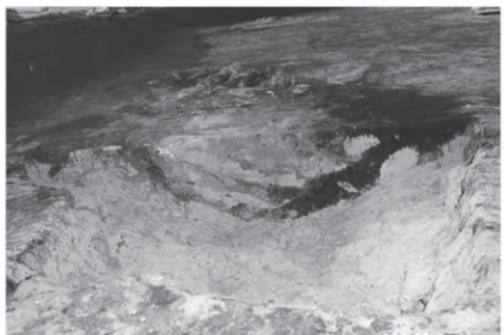
倒木痕 SK116 断面（南から）



倒木痕 SK145 断面（南西から）



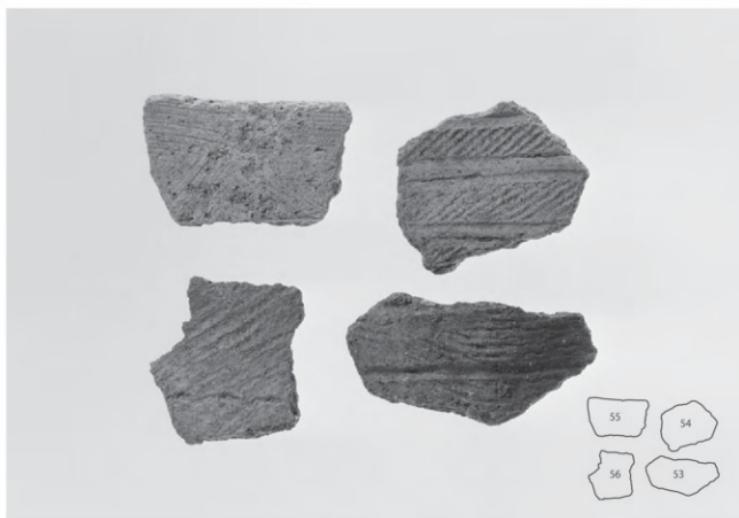
倒木痕 SK156 断面（北から）



倒木痕 SK188 断面（東から）



縹文土器（早期）



縹文土器（後・晚期）



縄文土器（早・前期）

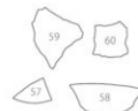


49

縄文土器（前期）



縄文土器（中期）



須恵器

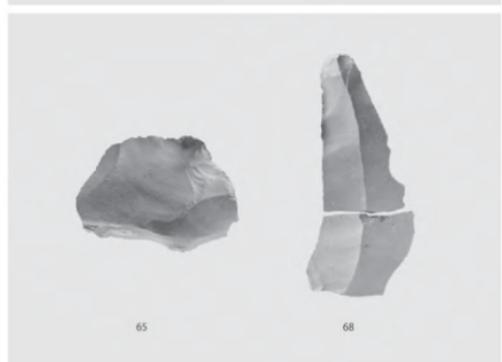


石器



61

石器



65

68

石器

報告書抄録

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第207集

北原2遺跡第1・2次・北原4遺跡発掘調査報告書

2013年3月29日発行

発行 公益財團法人 山形県埋蔵文化財センター

〒999-3246 山形県上山市中山字壁屋敷5608

電話 023-672-5301

印刷 株式会社 大風印刷

〒990-2338 山形県山形市藏王松ヶ丘1-2-6

電話 023-689-1111